福岡市埋蔵文化財調査報告書第1113集

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書　Ⅶ

五十川遺跡 7

－五十川遺跡第18次調査の報告－

２０１１
福岡市教育委員会

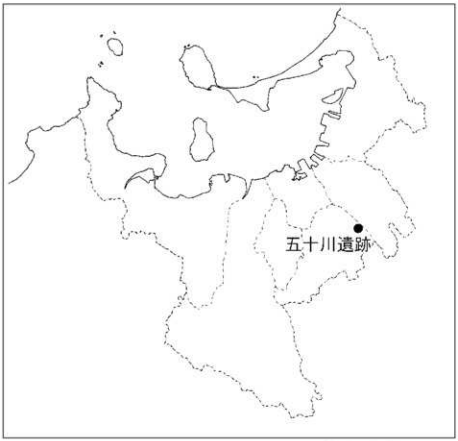
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1113集

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書　Ⅶ

五十川遺跡 7

ごじっかわ

－五十川遺跡第18次調査の報告－



遺 跡 略 号　GJK－18
遺跡調査番号　0915

２０１１
福岡市教育委員会

1　調査区南より
御供所井尻線予定地をのぞむ

2　調査区全景 南から

3　SK02遺物出土状況 南から

4　SR57出土 龍泉窯系青磁碗

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残されています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さまに活用していただくために、文化財の保護と活用に取り組んでいるところであります。

福岡市教育委員会では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、都市計画道路御供所井尻線道路整備事業にともない発掘調査を実施した、五十川遺跡第18次調査の成果を報告するものです。本調査では、弥生時代・古代・中世を中心としたさまざまな遺構が発見されました。これらは、当時の五十川の歴史を知る上で貴重な資料となるものです。本書が、市民の皆さまの文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成23年３月18日

福岡市教育委員会
教育長　山 田 裕 嗣

例　　言

1．本書は南区五十川２丁目地内における都市計画道路御供所井尻線道路整備事業に先だって，福岡市教育委員会が平成21年度に発掘調査を実施した五十川遺跡第18次調査の調査報告書である。
2．本書の執筆・編集は本田浩二郎の助言を得て松尾奈緒子が行った。
3．本書で使用した方位はすべて磁北であり，真北より6°40′西偏している。
　また，本書における座標は，国土座標第２系を用いている。
4．本書で用いた遺構の呼称は，溝をSD，土坑をSK，ピットをSP，性格不明遺構をSXと略号化している。
5．本書に掲載した遺構実測図の作成は本田・松尾が行った。
6．本書に掲載した遺物実測図の作成および製図は松尾が行った。
　ただし，Fig.50については，遺物実測・製図ともに山口朱美が行い，山口譲治氏のご教示を得た。
7．本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は本田・松尾が行った。
8．輸入陶磁器については以下の文献の分類を参考にし，佐藤一郎氏のご教示を得た。
　太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集
9．石器については吉留秀敏氏・板倉有大氏のご教示を得た。
10．本書に関わる遺物・記録等の全資料は，福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管・公開される予定である。
　また，SK01・02・04・07・98・SP88・96・SD09出土の黒曜石剥片は，組成をあきらかにし１点ずつ個別に収蔵している。

遺跡調査番号	0915			遺跡略号	GJK－18
所在地	南区五十川２丁目地内			分布地図番号	24－0088
開発面積	－　㎡	調査対象面積	－　㎡	調査面積	239㎡
調査期間	平成21年７月１日～平成21年９月30日			事前審査番号	13－１－77

本　文　目　次

第１章　調査の経過と方法……1
（１）調査に至る経過……1
（２）調査体制……1
（３）調査の方法……2
第２章　遺跡の地理的歴史的環境……3
（１）五十川遺跡の位置と周辺遺跡……3
（２）五十川遺跡のこれまでの調査……5
第３章　発掘調査の記録……8
（１）調査の概要……8
（２）Ⅰ区の調査　……10
ａ．弥生時代の遺構と遺物　……10
ｂ．古代の遺構と遺物　……23
ｃ．中世の遺構と遺物　……29
（３）Ⅱ区の調査　……35
ａ．トレンチ調査　……35
ｂ．中世の遺構と遺物　……39
（４）その他の出土遺物　……41
第４章　まとめ　……44

挿　図　目　次

Fig.1　御供所井尻線整備予定地内の調査区割図（S=1/2,000）……2
Fig.2　調査区周辺遺跡分布図（S=1/25,000）……4
Fig.3　五十川遺跡のこれまでの調査地点（S=1/4,000）……6
Fig.4　調査区位置図（S=1/500）……8
Fig.5　遺構配置図（S=1/100）・調査区北壁土層図（S=1/40）……（折り込み）
Fig.6　SK01平面図・断面図（S=1/30）……10
Fig.7　SK01出土遺物実測図（S=1/1・1/3）……11
Fig.8　SK02平面図・断面図（S=1/30）　Fig.9　SK02出土遺物実測図①（S=1/2）……12
Fig.10　SK02出土遺物実測図②（S=1/3）　Fig.11　SK02出土遺物実測図③（S=1/3）……13・14
Fig.12　SK02出土遺物実測図④（S=1/3）　Fig.13　SK02出土遺物実測図⑤（S=1/3）……15・16
Fig.14　SK04平面図・断面図（S=1/30）……17
Fig.15　SK04出土遺物実測図（S=1/1・1/3・1/4）……18
Fig.16　SK07平面図・断面図（S=1/30）　Fig.17　SK07出土遺物実測図（S=1/3）……19
Fig.18　SK98平面図・断面図（S=1/30）　Fig.19　SK98出土遺物実測図（S=1/3）……20
Fig.20　SP88平面図・断面図（S=1/30）……21
Fig.21　SP88出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……21
Fig.22　SP96平面図・断面図（S=1/30）　Fig.23　SP96出土遺物実測図（S=1/3）……21・22
Fig.24　SX63平面図・断面図（S=1/30）……22
Fig.25　SD09平面図・断面図（S=1/40）……24

Fig.26　SD09出土遺物実測図①（S=1/3）……25
Fig.27　SD09出土遺物実測図②（S=1/3）……26
Fig.28　SD09出土遺物実測図③（S=1/3）……27
Fig.29　SD09出土遺物実測図④（S=1/1・1/2）……28
Fig.30　SK11平面図・断面図（S=1/30）　Fig.31　SK11出土遺物実測図（S=1/3）……29・30
Fig.32　SK46平面図・断面図（S=1/30）　Fig.33　SK46出土遺物実測図（S=1/3）……30
Fig.34　SR56平面図・断面図（S=1/20）……31
Fig.35　SR56出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……32
Fig.36　SR57平面図・断面図（S=1/20）……32
Fig.37　SR57出土遺物実測図（S=1//3）……33
Fig.38　SD05平面図・断面図（S=1/40）……33
Fig.39　SB100平面図・断面図（S=1/40）Fig.40　SB100出土遺物実測図（S=1/3）……34
Fig.41　SA101平面図・断面図（S=1/40）……34
Fig.42　Ⅱ区トレンチ配置および耕作土Ｂ上面遺構配置図（S=1/200）……35
Fig.43　トレンチ１・トレンチ４土層図（S=1/40）……36
Fig.44　トレンチ２・トレンチ３土層図（S=1/40）……37
Fig.45　Ⅱ区耕作土・トレンチ出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/3）……38
Fig.46　SX99出土遺物実測図（S=1/3）　Fig.47　SX99平面図・断面図（S=1/40）……39・40
Fig.48　そのほかの出土遺物実測図①（S=1/3）……41
Fig.49　そのほかの出土遺物実測図②（S=1/1・1/2・2/3）……42
Fig.50　そのほかの出土遺物実測図③（S=1/1）……43
Fig.51　御供所井尻線整備予定地内の遺構配置図（S=1/500）……（折り込み）
Fig.52　調査区周辺の遺構変遷図（S=1/1000）……45
Fig.53　古代官道関係図（S=1/10000）……46

表　目　次

Tab. 1　御供所井尻線整備事業にともなう発掘調査一覧……3
Tab. 2　五十川遺跡調査一覧……7

図　版　目　次

巻頭カラー　1　調査区南より御供所井尻線予定地をのぞむ　2　調査区全景 南から
3　SK02遺物出土状況 南から　4　SR57出土 龍泉窯系青磁碗
P.L. 1　1　SK02出土弥生土器壺（Fig.10－4）　2　SK02出土弥生土器甕（Fig.13－18）
3　SR56出土龍泉窯系青磁碗（Fig.35－4）　4　SR56出土龍泉窯系青磁碗（Fig.35－5）
5　SR57出土龍泉窯系青磁小碗（Fig.37－2）　6　SD09出土不明青銅製品
P.L. 2　1　出土旧石器およびSD09出土削器（Fig.50）
2　SD09出土磨製石剣（Fig.29）　3　SK01・04・SD09出土石鏃

第１章　調査の経過と方法

（１）調査に至る経過

福岡市教育委員会は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成13年８月１日、「都市計画道路御供所井尻線道路整備事業」の対象地となる福岡市南区五十川２丁目地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市土木局道路建設部南部建設課（現道路下水道局建設部中部道路課：以下省略）から、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第１課：以下省略）に対して、事前審査申依頼が提出された（事前審査番号13－１－77）。これをうけて、埋蔵文化財課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である五十川遺跡に位置しており（分布地図24－0088）、かつ周辺で過去に数度の発掘調査を行っていたことから、遺跡が存在する可能性が高いと考え、確認調査の実施が必要である旨を回答し、平成13年10月31日・平成14年１月23日・同年７月23日に確認調査を実施した。確認調査では、地表下30cm～60cmで遺物包含層を確認し、地表下50cm～90cmで弥生時代から中世にいたる遺構・遺物を検出した。この結果に基づいて、土木局と埋蔵文化財課は協議を行い、遺跡の存在が予想される台地部分を対象として、記録保存のための発掘調査を令達事業として実施することで合意した。発掘調査は、用地買収後に既存の建物の解体が終了しまとまった面積が確保できた段階で順次行われ、平成14年８月19日から平成17年６月３日までの期間に４次の調査が実施され、2010年３月までに報告書もすべて刊行されている。

本書で報告する発掘調査は、未買収のため調査が行われていなかった土地を対象として実施されたもので、「都市計画道路御供所井尻線道路整備事業」にともなう発掘調査としては５次を数える最後の調査である（調査番号0915）。発掘調査は平成21年７月１日から同年９月30日まで実施し、平成22年度に整理作業を行って報告書を刊行した。

（２）調査体制

調査を実施した平成21年度および整理報告を行った平成22年度の組織は以下の通りである。

調査委託：道路下水道局建設部中部道路課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第１課（調査時）・埋蔵文化財第２課（整理報告時）

調査総括：埋蔵文化財第１課　課長　濱石哲也（調査時）
埋蔵文化財第２課　課長　田中壽夫（整理報告時）
埋蔵文化財第１課　調査係長　米倉秀紀（現埋蔵文化財第２課調査第１係長）

調査庶務：文化財管理課　管理係　井上幸江（現埋蔵文化財第１課管理係）

事前審査：埋蔵文化財第１課　事前審査係　阿部泰之

調査担当：埋蔵文化財第１課　調査係　本田造二郎（現福岡市立博物館学芸課）
松尾奈緒子（現埋蔵文化財第２課調査第１係）

調査作業：石川洋子　岩本三重子　上野照明　内野信代　大庭智子　越智信孝　小野千佳
小野山次吉　唐島栄子　桑野孝子　草場恵子　許斐拓生　渋谷一明　豊丸秀仁
中島道夫　永田とみ子　中村桂子　西川シズ子　野口リウ子　服部弘勝　結城フヂコ

整理作業：吉盛　泉　渡邊宏代　（五十音順・敬称略）

（3）調査の方法

五十川遺跡は、南北800m、東西240mほどの規模の洪積中位段丘面上に立地する。この台地の北方は鞍部を介して那珂遺跡群が展開する台地へと連続するが、その他３方は沖積地に囲まれているため、ほぼ独立した台地となっている。「都市計画道路御供所井尻線道路整備事業」に関係する道路用地は、この台地の南西端を斜めに貫通する（Fig.１・３）。用地内の事業前の状況は戸建てを主とする住宅地であり、これらの用地買収と解体が終了し、ある程度まとまった面積が確保された段階で、順次発掘調査に着手していった。調査は平成14年度に開始したが、用地買収の関係等から断続的となり、最終的に予定地内のすべての調査を終えたのは平成22年度であった。

発掘調査は、年度ごとに次数を区別し、平成14年度～平成17年度に４次、やや期間をあけて平成22年度に１次、合計５次にわたって実施した。平成14年度～平成17年度の４年間に断続的に行われた10・11・13・14次調査については、着手順にＡ区～Ｉ区までの調査区名を与え、それぞれの調査区で検出した遺構に対しても４桁の連番号を付して、すでに成果が報告されている（Tab.１）。本書で報告する平成21年度に行った18次調査では、10次調査～14次調査とは別に、調査区を南北でＩ区・Ⅱ区にわけ、検出した遺構にはその性質に関係なく01から連続する番号を付与して記録をとった。

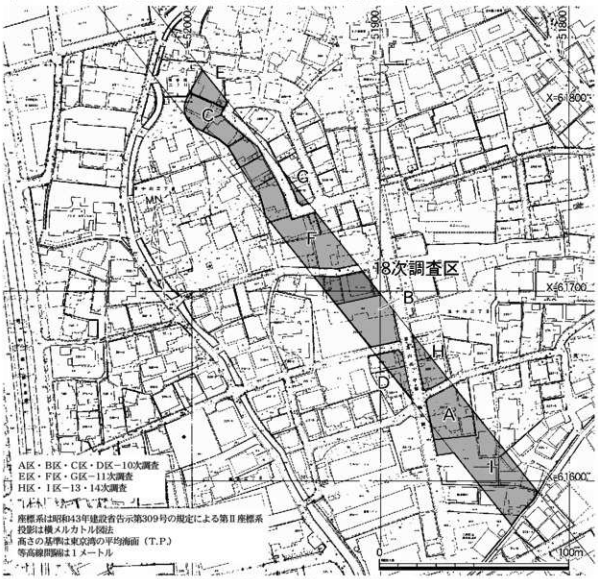


Fig.１　御供所井尻線整備予定地内の調査区割図（S=1/2,000）

Tab. 1　御供所井尻線道路整備事業にともなう発掘調査一覧

調査年度	調査番号	次数	調査期間	区	調査面積(㎡)	担当	調査の概要
平成14	0229	10	2002.8.19～2003.3.26	A	1100	横山	弥生時代－土坑 古墳時代－竪穴住居１＋溝２＋井戸１＋円墳１＋土坑 鎌倉時代－溝２＋土坑
				B		上角	弥生時代前期－溝１＋貯蔵穴３ 奈良時代－溝１　室町時代－溝２ 時期不詳－掘立柱建物３
				C		横山	弥生時代－竪穴住居３＋貯蔵穴４＋土坑３ 古墳時代－方形周溝墓２＋石棺墓１ 平安時代－土壙墓１＋土坑１ 室町時代－大溝２　時期不詳－土坑１
				D			弥生時代－溝１　室町時代－溝４＋土坑１
平成15	0314	11	2003.5.15～2004.1.31	E	202	吉武	弥生時代－貯蔵穴３　古墳時代前期－方形周溝墓２ 室町時代－溝２
				F	1134		弥生時代前期～中期 －竪穴住居４＋溝３＋木棺墓３＋土坑墓２ ＋甕棺墓９＋貯蔵穴20＋土坑17 古墳時代前期－竪穴住居４ 弥生～古墳時代－竪穴住居１＋土坑４ ＋性格不明遺構１＋柱穴多数 奈良時代－溝１ 中世－柵１＋掘立柱建物１＋溝７＋土坑２
				G	32		弥生時代前期－竪穴住居１　室町時代－溝１
平成16	0444	13	2004.8.2～2004.8.31	H	129		奈良時代－井戸１ 室町時代－井戸１＋大溝１＋地下式壙１＋土坑１
平成16 平成17	0481	14	2005.1.24～2005.6.3	I	960		旧石器時代－包含層　弥生時代－貯蔵穴１ 古墳時代前期－土坑６＋井戸１ 平安時代－土坑１　室町時代－土坑１＋堀立柱建物３
平成21	0915	18	2008.7.1～2008.9.30	－	239	本田松尾	弥生時代前期　－貯蔵穴５＋柱穴多数＋性格不明遺構１ 奈良時代－溝１ 中世－溝２＋木棺墓２＋土坑２＋掘立柱建物１＋柵列１

第２章　遺跡の地理的歴史的環境

（１）五十川遺跡の位置と周辺遺跡

福岡平野は、那珂川・御笠川の沖積作用によって形成された沖積低地と、阿蘇山起源のAso－４火砕流によって形成された平坦な洪積台地からなる。このうちの洪積台地は、河川開析をうけて分断されながらも福岡平野を縦断するようにひろがっており、福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水をへて那珂川安徳町にのびる台地と、福岡市博多区板付から諸岡、麦野、元町をへて春日市春日原に達する台地の、２つのまとまりに分けることができる。福岡平野の人々は、古くから、このような洪積台地を拠点として生活をいとなんできた。このため、これらの台地上には、歴史的に重要な集落遺跡が数多く展開している。五十川遺跡もこれらの洪積台地上に立地する集落遺跡のうちの１つである。

1　五十川遺跡（●は調査地点）　2、久保園遺跡　3、席田大谷遺跡　4、宝満尾遺跡　5、雀居遺跡　6、東那珂遺跡　7、下月隈C遺跡
8、立花寺B遺跡　9、井相田C遺跡　10、那珂君休遺跡　11、板付遺跡　12、板付東遺跡　13、高畑遺跡　14、麦野A遺跡　15、麦野B遺跡
16、南八幡遺跡　17、諸岡A遺跡　18、諸岡B遺跡　19、三筑遺跡　20、笹原遺跡　21、山王遺跡　22、比恵遺跡　23、那珂遺跡群
24、井尻A遺跡　25、井尻B遺跡　26、井尻C遺跡　27、寺島遺跡　28、須玖遺跡群　29、弥永原遺跡　30、横手遺跡　31、日佐遺跡
32、警弥郷B遺跡　33、野間A遺跡　34、野間B遺跡　35、大橋A遺跡　36、大橋B遺跡　37、大橋C遺跡　38、大橋D遺跡　39、大橋E遺跡
40、三宅A遺跡　41、三宅B遺跡　42、三宅C遺跡　43、和田田蔵池遺跡　44、和田A遺跡　45、和田B遺跡　46、野多目A遺跡

※アミは台地・丘陵上の遺跡を示す

Fig. 2　調査区周辺遺跡分布図（S=1/25,000）

五十川遺跡は、福岡平野の中央部にある、南北約800m、東西約240mの広さをもつ独立台地に立地する。標高は９m～11mをはかる。東西は沖積低地に囲まれているが、北端では鞍部を介して那珂・比恵遺跡群が展開する台地に連なり、狭い谷で隔てられた南側の台地には、井尻Ｂ遺跡が隣接する。

五十川遺跡北方の那珂・比恵遺跡群は、弥生時代中期後半・古墳時代前期・古代前半にピークを迎える、福岡平野を代表する大規模遺跡である。水稲農耕の開始とともに台地縁辺の複数地点で集落がいとなまれ、弥生時代中期になると樹林を伐採して台地中央部に進出し大集落に発展する。そして、弥生時代後期には一時的に衰退するものの、奴国の中枢ともいわれる須玖遺跡群がおとろえる弥生時代終末頃には再びピークを迎え、那珂八幡古墳を中軸とした計画的な墓域・集落域の配置がみとめられるようになる。５世紀～６世紀になると再び集落規模は縮小するが、６世紀中頃に東光寺剣塚古墳が造営されたことを契機として再度集落は拡大し、７世紀代まで最後のピークを迎える。この時期には、那津官家や初期官衙などと推定される柵列や大型掘立柱建物群、方形区画溝などが発見されており、同時期に出土する初期瓦とともに注目を集めている。

一方、五十川遺跡南側の井尻Ｂ遺跡は、弥生時代後期後半～古墳時代前期・古代にピークを迎える集落遺跡である。井尻Ｂ遺跡では、弥生時代後期後半になると遺跡の北半を中心に集落が成長をはじめ、那珂・比恵遺跡群が大集落へと成長する弥生時代終末頃には、青銅器・ガラス製品生産関連遺物などが出土し、生産遺跡としてピークを迎える。しかし、古墳時代中期になると遺跡南半で古墳が営まれるのみとなり、生活遺構はほとんどみられなくなってしまう。その後、大宰府が成立する７世紀末～８世紀初頭になると、台地中央部において、井尻廃寺と指摘されている寺院遺構や官衙遺構が検出されるようになり、再びピークを迎える。井尻Ｂ遺跡の南側には８世紀前半に直線的な道路として整備された古代官道水城西門ルートがあり、これらの遺構との深い関連が容易に想定される。

（２）五十川遺跡のこれまでの調査

五十川遺跡では、これまで19次にわたって調査が行われている。しかし、市道整備事業にともなって調査がなされた台地南西部以外では、小規模な調査が散発的におこなわれただけで、五十川遺跡の詳細についてはまだ分からないことが多い。現在の調査成果からは、弥生時代前期後半および古墳時代前期、中世後半に集落としてのピークがあると考えられる。

これまでの調査では、台地南西部においてナイフ形石器・原の辻型台形石器などが確認されており（11・14・18次調査）、後期旧石器時代後葉が五十川遺跡のはじまりといえる。その後も、縄文時代を通じて打製石鏃などの石器類が散発的に出土するものの遺構は検出されておらず、人間活動は低調であったとおもわれる。遺構が検出され、五十川遺跡に人が定住を始めたことが確認できるのは、那珂・比恵遺跡群にややおくれる弥生時代前期後半になってからである。台地南西部や北東部などの低地に面する台地の縁辺部を選地して、竪穴住居や土坑・貯蔵穴を中心とする集落域と甕棺墓を含む墓域が展開する（１・２・10・11・18次調査）。この後、台地南西部では中期前半まで遺構が継続するが、台地東部において中期後半の貯蔵穴と後期の住居・建物を検出したほかは（３次調査）、弥生時代中期・後期の遺構はほとんどみつかっていない。

古墳時代にはいると、台地東部（１次調査～４次調査）と台地南西部（10次調査～14次調査）において前期の竪穴住居群や方形周溝墓群などを確認しており、台地上に展開していた可能性がある。しかし、那珂・比恵遺跡群や井尻Ｂ遺跡と同様に、中期の遺構・遺物は発見されておらず、後期におい

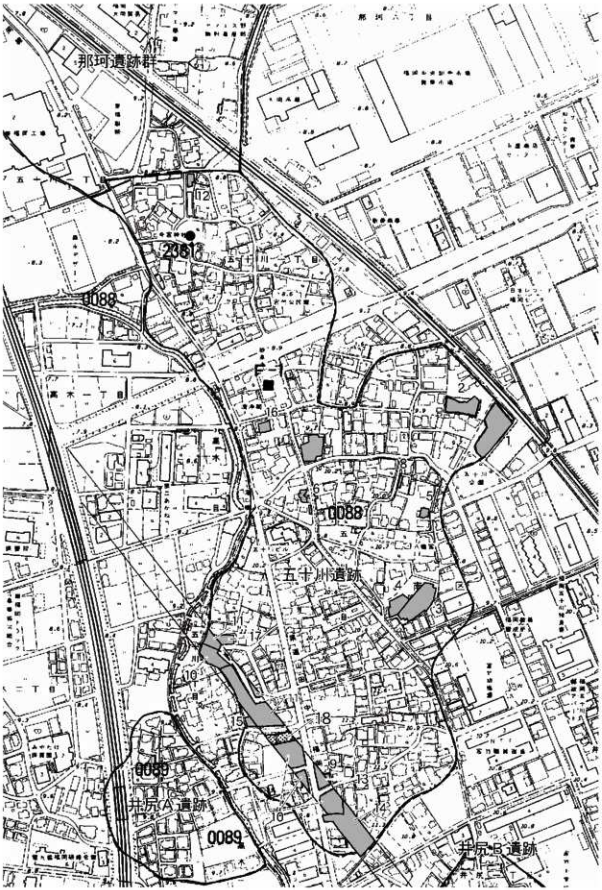


Fig. 3　五十川遺跡のこれまでの調査地点（S=1/4,000）

ても検出された遺構は少ない。古代では、７世紀～８世紀に位置付けられる溝・井戸等は確認され、那珂・比恵遺跡群でみられる初期瓦を出土する地点もあるが（１・９次調査）、竪穴住居や掘立柱建物どは検出されていない。しかし、中世にはいると、11世紀代～13世紀代のものとおもわれる掘立柱建物や井戸、輸入陶磁器を副葬する木棺墓などが確認されており、再び人々が生活を営んだ痕跡が回復しはじめる。そして、14世紀代～16世紀代には、台地東側（３・４次調査）や台地南西側（10・11・13次調査ほか）において、方形を指向するような大溝と掘立柱建物が検出され、戦国時代の豪族居館との関連が指摘されている。

Tab. 2　五十川遺跡調査一覧

（　　）は導供所井尻線建設に伴う調査

調査次数	調査番号	調査面積（㎡）	調査期間	主な検出遺構／特記すべき出土遺物	報告書
1	7809	1,449	1979.1.22～3.10	弥生・古墳・古代－溝＋土坑 中世前半－井戸（古代瓦・黒曜石碁石出土）	市報363集
2	8338	660	1983.4.25～6.18	弥生前期末－住居　古墳前期－住居＋井戸　古墳時代－建物 古代－建物＋溝　　中世－建物＋溝	市報111集
3	9538	905	1995.11.6～1996.1.9	弥生中期－貯蔵穴　弥生後期－住居・建物 古墳－土坑　古墳後期－建物 古代－井戸＋土坑＋土壙墓 中世後半－溝＋井戸＋土坑（土壙墓含む）＋建物	市報570集
4	9704	285	1997.4.8～5.6	古墳前期－井戸　　中世（14～15世紀）－溝＋建物＋土坑	
5	9757	96	1997.12.4～12.11	古墳後期－溝＋住居＋建物	市報720集
6	9835	127	1998.9.24～9.30	古代－建物　　近世－土坑	
7	9837	510	1998.10.1～11.10	古墳－土坑　　中世・近世－建物＋土坑＋溝	
8	9846	19	1998.11.6～11.10	時期不詳－土坑	
9	0215	42	2002.5.10～5.20	弥生－木棺墓　中世－溝＋井戸（古代瓦出土）	市報793集
10	0229	1,100	2002.8.19～2003.3.28	弥生前期－住居＋溝＋貯蔵穴＋土坑　弥生中期－住居＋溝 古墳前期－円墳＋方形周溝墓＋石棺墓　古墳後期－住居＋溝 古代－溝＋土壙墓 中世後半－溝＋土坑	市報1019集
11	0314	1,368	2003.5.15～2004.1.31	弥生前期・中期－住居＋溝＋貯蔵穴＋土坑＋木棺墓＋土壙墓＋甕棺墓 古墳前期－住居＋方形周溝墓　古墳後期－土坑 古代－溝　　中世後半－建物＋溝＋土坑	
12	0407	150	2004.4.5～5.10	古墳後期－土坑 古代－溝 中世－溝ほか	年報19
13	0444	129	2004.8.2～8.31	古代－井戸　　中世後半－溝＋地下式土壙＋井戸＋土坑	市報1029集
14	0481	960	2005.1.24～6.3	旧石器－包含層　　弥生－貯蔵穴 古墳前期－土坑＋井戸　古代－土坑　　中世－建物＋土坑	
15	0610	56	2006.4.24～5.31	弥生－竪穴住居 中世後期－溝ほか	市報978集
16	0766	150	2008.3.3～3.21	弥生－溝 中世後期－溝ほか	未報告
17	0846	43	2008.10.20～10.31	弥生前期末～中期初頭－貯蔵穴 古墳前期－溝　　古墳後期－溝　　中世後期－溝	年報23
18	0915	150	2009.7.1～9.30	弥生前期－貯蔵穴・土坑・柱穴　　古代－溝 中世－土坑・木棺墓・溝・掘立柱建物・柵列	本書

第３章　発掘調査の記録

（１）調査の概要

第18次調査区は、台地の南西端に位置する、「都市計画道路御供所井尻線道路整備事業」にともなう五十川遺跡の要調査範囲のほぼ中央にあり、南側に第10次調査のＢ区、道路を挟んで北側に11次調査のＦ区が隣接する（Fig.４）。調査地点の現況は住宅解体後の平坦な土地であり、標高は12.20mをはかる。

排土を場内で処理する必要があったため、まず調査区の北側をⅠ区として最初に調査を行い、Ⅰ区の調査終了後に反転して南側のⅡ区の調査を行うこととした。Ⅰ区とⅡ区の境界は、Ⅰ区南端で検出した、東西方向に伸びる南へのおちである（Fig.５）。

Fig.４　調査区位置図（S=1/500）

Fig. 5 遺構配置図（S=1/100）・調査区北壁土層図（S=1/40）

発掘調査は平成22年７月１日より開始したが、条件整備その他に時間を要し、７月14日から重機を投入してⅠ区の表土剥ぎを行った。Ⅰ区の遺構面上層には黒褐色包含層が堆積していたが、遺構が検出されず、遺物もごく少量しか含まれていないことから、これを重機によって除去し、鳥栖ローム層上面を遺構面とした（Fig.５）。遺構面の標高は11.7mをはかる。７月16日からは遺構検出・遺構掘削をすすめて記録作成を行い、８月20日に全景写真を撮影した。その後８月２５日から重機によりⅠ区を埋め戻し、引き続いてⅡ区の表土剥ぎを行った。

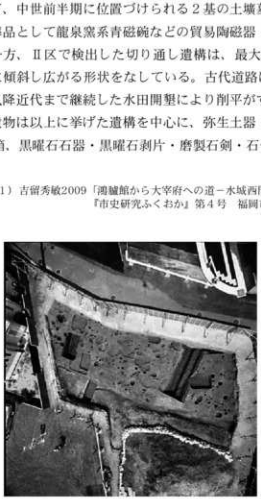
Ⅱ区もⅠ区と同様に最終的には鳥栖ローム層上面を遺構面とした。しかし、Ⅱ区では、調査区全体が、Ⅰ区とⅡ区の境界である南へのおちを肩とする、最大幅15mの切り通し遺構内に位置していたため、鳥栖ローム層にいたるまでに遺構面が存在する可能性も想定された。このため、トレンチ調査を先行し、遺構面を確認する方法によって調査をすすめ、９月14日には全景写真を撮影し、同月18日に埋め戻しを行った。その後、出土土器の洗浄などの整理作業を行い、平成21年９月28日に機材を撤収して調査を完了した。

代表的な遺構としては、Ⅰ区で検出された、弥生時代前期の貯蔵穴５基、奈良時代の区画溝１条、中世前半期の土壙墓２基などが挙げられる。弥生時代前期の貯蔵穴のうち、とくに長方形の貯蔵穴SK02は検出面から1.30mの深さまで残存しており、底面では植物繊維痕が検出され、多くの土器・石器が出土した。また、奈良時代の区画溝SD09は主軸を真北にとるもので、北側のＦ区・南側のＢ区において検出された溝に続く遺構として重要である。さらに、この区画溝と若干主軸を違えるようにして、中世前半期に位置づけられる２基の土壙墓を列状に検出した。人骨の依存はなかったものの、副葬品として龍泉窯系青磁碗などの貿易陶磁器・土師器坏が出土した。

一方、Ⅱ区で検出した切り通し遺構は、最大幅15m、最小幅６ｍ前後を測り、東側に向けて緩やかに傾斜し広がる形状をなしている。古代道路に関連する遺構の可能性も指摘されたが[註1]、中世後半以降近代まで継続した水田開墾により削平がすすんでいるため確定できなかった。

遺物は以上に挙げた遺構を中心に、弥生土器・土師器・須恵器・龍泉窯系青磁碗等の貿易陶磁器が12箱、黒曜石石器・黒曜石剥片・磨製石剣・石包丁等がコンテナケース５箱、合計17箱が出土した。

（註１）吉留秀敏2009「鴻臚館から大宰府への道－水城西門ルート福岡市内探索の中間報告－」
『市史研究ふくおか』第４号　福岡市史編纂室編



Ph.１　Ⅰ区全景 南から

Ph.２　Ⅱ区全景 北から

（2） Ⅰ区の調査

a．弥生時代の遺構と遺物

① 貯蔵穴

SK01（Fig.6・Ph.3）

Ⅰ区西半北端に位置する弥生時代前期板付Ⅱa式期の貯蔵穴である。標高10.7mで検出し、南東隅を別の遺構にきられる。主軸をほぼ南北にとり、1辺約1.6mの隅丸方形のプランをなす。検出面から深さ0.3m程度残存する。

埋土はロームブロックを含む暗褐色～黒褐色土を主体とする。Fig.6に図示した南側からSK01上層に平面的に広がる土層1は、陶器片が出土することから、除去しきれていなかった遺構面上層の包含層である。

［SK01出土遺物（Fig.7）］

弥生土器および石器が出土した。

1は弥生土器鉢である。口縁端部は面取りし、口縁部に近い胴部に段を設ける。内面は褐色化処理し、丁寧な横方向のヘラミガキで仕上げている。口径を復元することはできないが大型品である。2は弥生土器甕である。口縁は短く折れ曲がるように外反し、端部は強く横ナデした後に下端にヘラ状工具による浅くまばらな刻目を施す。胴部は張らない。内外面ともに工具痕ののこるナデ調整で仕上げる。3は外端部が張り出す弥生土器甕の底部、4は弥生土器壺の底部である。

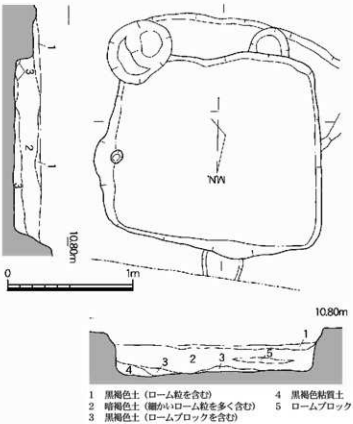
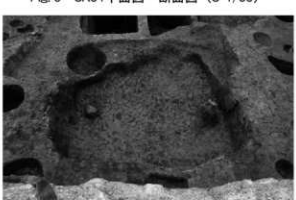


Fig.6　SK01平面図・断面図（S=1/30）



Ph.3　SK01 北から

5は黒曜石製の平基式五角形鏃である。長さ3.15cm、幅1.15cm、厚さ0.3cm、重量1.05gをはかる。縦長剥片の打点を基部として石鏃の主軸を決め、両側面からランダムな二次調整を加えて製作されていることがわかる。6は黒曜石製の平基式三角鏃である。長さ1.8cm、幅1.05cm、厚さ0.305cm、重量0.53gをはかる。

石器は図示した黒曜石石鏃2点のほかに黒曜石剥片が12点、計38.33g出土した。そのすべてが黒色の腰岳産のものである。これらの剥片には、調整剥片が1点、使用痕のある剥片が3点含まれており、このうち使用痕のある剥片にはノッチ状剥離がのこるものがある。

SK02（Fig.８・Ph.４・５）

Ⅰ区西半、SK01の南側で検出した弥生時代前期板付Ⅱａの式期の貯蔵穴である。検出面の標高は10.6mである。長軸を南北方向にとる隅丸長方形のプランをなし、長辺は2.8m、短辺は1.55mをはかる。底面は平坦で、北西隅で若干オーバーハングするものの、壁面はほぼ垂直にたちあがる。検出面から深さ1.3mほど残存し、本調査区内の貯蔵穴では最も残りがよい。F区SK6045と主軸・規模を同じくする。

埋土の主体となるのはロームブロックを含む暗褐色土～暗黄灰褐色土であり、土器を多量に含む最下層の暗褐色粘質土（土層11）とは明確に区別できる。土器の直下からは植物繊維痕が検出されており（Ph.５）、最下層の暗褐色粘質土は使用時あるいは廃絶直後に堆積したものと考えられる。

［**SK02出土遺物**（Fig.９～13）］

弥生土器および石器が出土した。

Fig.９は、頁岩製の太型蛤刃石斧である。幅9.1cm、長さ4.85mが残存しており、厚さは1.9cm、重量は46.68gを測る。

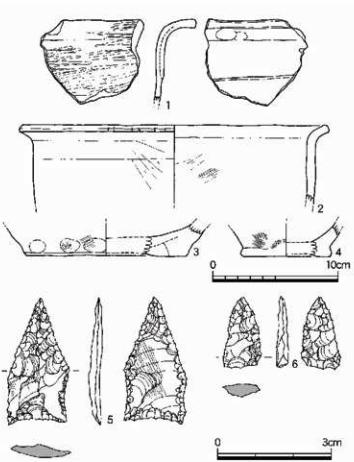


Fig.７　SK01出土遺物実測図（S=1/1・1/3）

１～３は中型の壺、４～９は大型の壺である。このうち４と５、８と９は同一個体と考えられる。出土した壺の大半は、口縁部外面を肥厚させることによって頸部との境界をつくりだすタイプのものである。とくに８は粘土を貼りつけることによって肥厚させていることがよくわかる。磨滅がすすんでいるものの、外面には横方向のヘラミガキ、内面には指オサエやハケ調整の痕跡を観察できるものもある。10・11・15～17は鉢である。10は胴部最大径に段を形成しており、11よりも器高が高い形態となるタイプである。15は縄文時代晩期に系譜を求められるものである。16は外面に横方向のヘラミガキが施され、黒化処理されている。12・13は壺あるいは鉢の底部である。12は外面に指ナデの痕跡が明瞭に残る。14は壺の底部である。底部から胴部最大径までのたちあがりの角度が急であり、１～９のようなこの時期に通有の形態ではない。18は甕である。焼成後に底部に穿孔をおこなっている。口縁部は短く外反し、端部全面に木製品の小口のようなもので刻目を施す。胴部の張りはゆるく最大径は中位にある。19～23は甕の口縁部片で、19～22は突帯文土器である。24は直径３cm、厚さ0.4cmをはかる円盤形の土製品である。両面から穿孔をこころみた痕跡があるが貫通していない。磨滅がすすんでおり調整・使用痕などはうかがえない。25～35は甕の底部である。このうち25・26・32は外端部が、張り出すタイプである。

図示したFig.９の石斧以外に、SK02からは、玄武岩片および黒曜石剥片が出土した。黒曜石剥片は49点、合計163.2gは出土した。そのすべてが黒色の腰岳産のものである。これらの剥片には、調整剥片が１点、使用痕のある剥片が７点、残核が７点含まれている。また、使用痕のある剥片のうち、

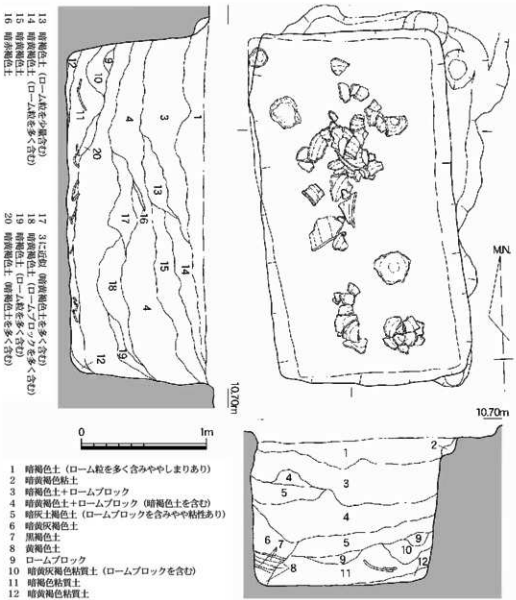


Fig. 8　SK02平面図・断面図（S=1/30）

Ph. 4　SK02遺物出状況　南から

Ph. 5　SK02床面検出状況　南から

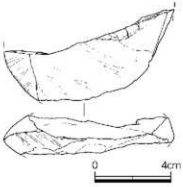


Fig. 9　SK02出土遺物
実測図①（S=1/2）

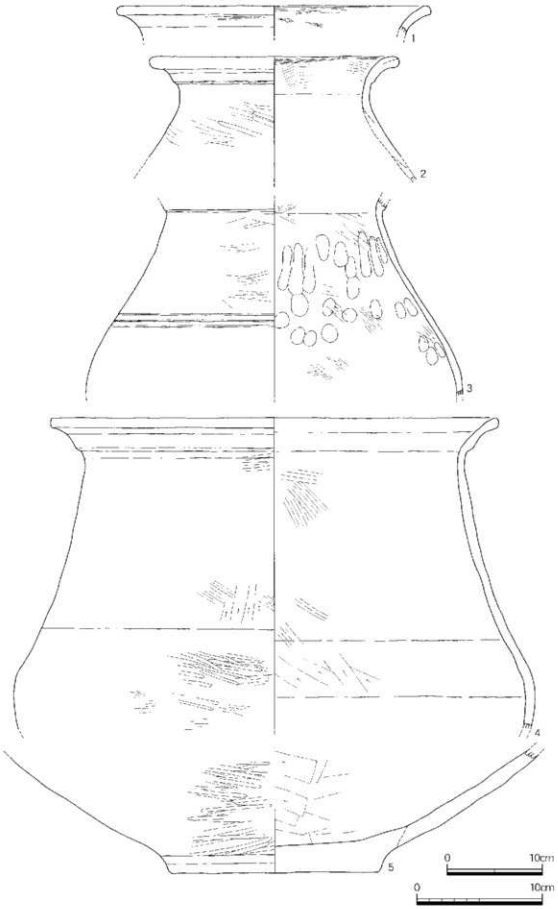


Fig.10　SK02出土遺物実測図②（S=1/3・1/4）

4のみ S＝1/4

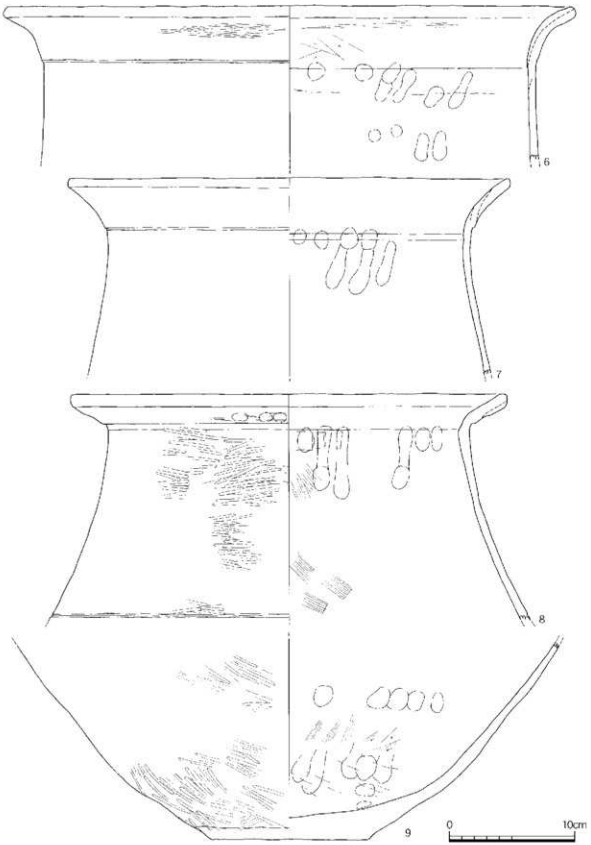


Fig.11　SK02出土遺物実測図③（S=1/3）

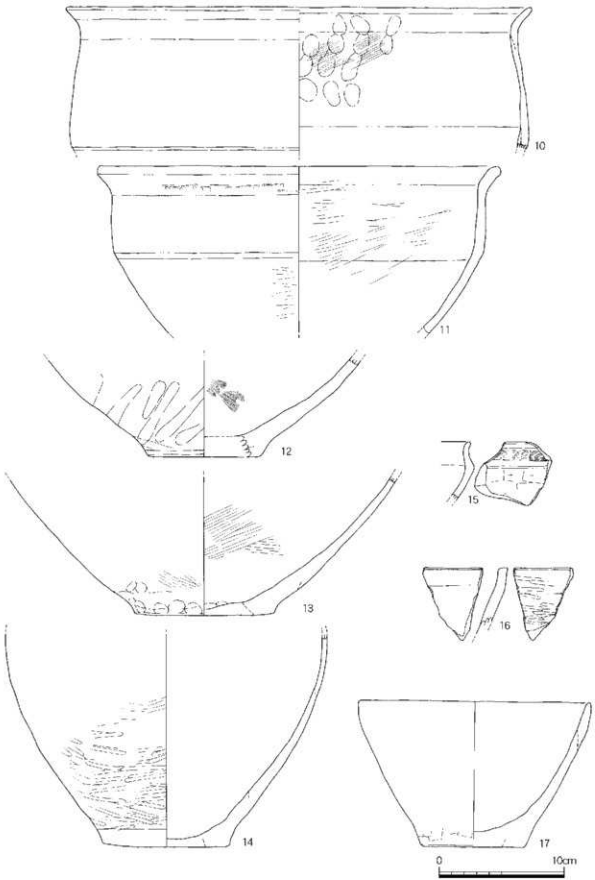


Fig.12　SK02出土遺物実測図④（S=1/3）

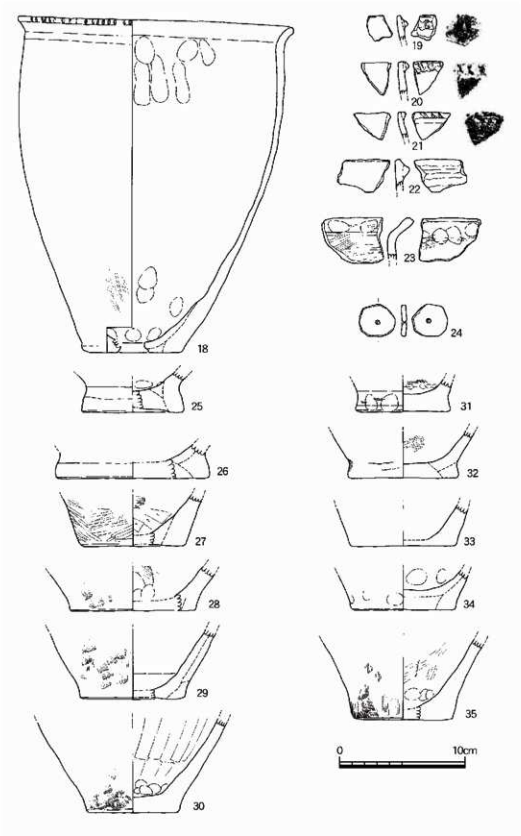


Fig.13　SK02出土遺物実測図⑤（S=1/3）

刃部の角度などから、掻器として使用したと考えられるものが１点、削器として使用したと考えられるものが２点みとめられる。

SK04（Fig.14・15・Ph.6）

Ⅰ区西半、SK01の南東側で検出した弥生時代前期板付Ⅱa式期に埋没した貯蔵穴である。SK02に北西隅をきられる。検出面の標高は10.6mをはかる。SK01・SK02と同様に、主軸をほぼ南北方向にとる、一辺2.25mの隅丸方形のプランをなす。底面は平坦でほぼ垂直に壁面がたちあがるが、北東隅では底面が一段低くなり、長辺1.8m、短辺1.25mをはかる隅丸方形の土坑状のおちこみとなる。検出面からの深さは高いところで0.2m、北東隅の土坑状落ち込みで0.45mほどである。

Ph.6　SK04 南から

埋土はローム粒を含むしまりの強い暗褐色土～黒褐色土であり、下層ほど粘性が高い。SK02と異なり、土器は、北西隅の土坑状のおちこみ部分の上層を中心に出土しており、埋没過程に廃棄されたものと考えられる。

［SK04出土遺物］

弥生土器および石器が出土した。

１は黒曜石製三角形鏃である。基部が欠損している。残存長1.65cm、最大幅1.05cm、厚さ0.35cm、重量0.47gをはかる。主要剥離面から、鏃の主軸にそろえて縦長剥片を使用していることがわかる。

２は壺である。口縁部と頸部を画する段はゆるく、あまり目立たない。３～５は甕である。３は口縁部の外反も弱く端部に施文しない。４は長く外

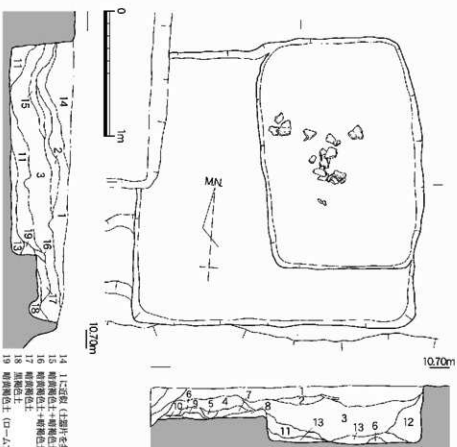


Fig.14　SK04平面図・断面図（S=1/30）

反する口縁端部をまるくおさめ、下端にヘラ状工具によって浅い刻目を施す。底部が失われているが、体部の形態から比較的器高が低いタイプであると思われる。５の口縁は長く外反し、口縁端部は面取され、下端には浅い刻目が間隔をあけて施される。胴部の張りが強く、頸部で一度すぼまってから口縁部へといたる。体部外面は縦方向のハケ調整を行った後に頸部を強く横ナデし、さらに口縁部と頸部の境界を縦方向のハケ調整を行って強調している。６は鉢である。口縁は短く外反し、端部を面取りする。SK02出土資料とは異なり、胴部下半にある屈曲点ではなく、胴部上半に段をもうけるタイプである。口径は51.4cmに復元できる大型品で、内外面ともに横方向のヘラミガキで丁寧に仕上げ褐色化処理をほどこしている。７は壺の底部、９は甕の底部である。

石器は図示した黒曜石石鏃１点のほかに、珪質頁岩製柱状片刃石斧１点、および黒曜石剥片が43点、計128.8g出土した。黒曜石剥片はすべて黒色の腰岳産のものである。これらの剥片には、使用痕のある剥片が５点、残核が３点含まれている。また、使用痕のある剥片のうち、刃部の角度から掻器として使用したと考えられるものが１点みとめられる。

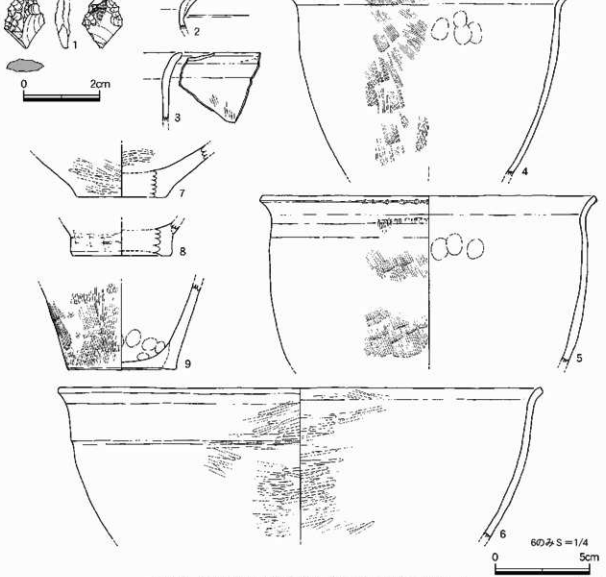


Fig.15　SK04出土遺物実測図（S=1/1・1/3・1/4）

SK07（Fig.16・Ph.7）

Ⅰ区中央部の調査区北壁際で検出した弥生時代前期の土抗である。検出面の標高は10.6mをはかる。北側は調査区外へとつづくため正確な平面形・規模は不明であるが、ほぼ南北方向に主軸をそろえる隅丸長方形のプランをなすと思われる。東西辺は1.25m、南北辺は0.75mを検出した。検出面から深さ0.2m程度残存している。底面は平坦で壁面はほぼ垂直にたちあがるが、南東隅には直径0.15m、深さ0.2mを測る小穴を設けている。

埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土で、土器（Fig.17－1）はほぼ底面直上で出土した。

［SK07出土遺物（Fig.17）］

弥生土器および石器が出土した。石器には旧石器石核が１点含まれている（Fig.50－３に図示）。

１は底面直上で出土した壷の胴部上半である。器面の剥落がすすんでいる。頸部と胴部の境界は明確ではない。２～４は甕である。２は口縁端部をまるくおさめ、端部前面にヘラ状工具によって浅い刻目を施す。３は頸部がすぼまる形をなし、口縁端部を面取りし刻目を施さない。鉢の可能性もある。４は口縁端部を面取りした後、端部全面に木製品の小口のようなもので浅い刻目をいれる。外面にはススが付着している。５は壷の底部である。６は外端部がやや張り出す弥生土器壺あるいは鉢の底部である。外底面にハケ調整を行っている。

弥生時代の所産と考えられる石器は黒曜石剥片が10点、計81.36g出土した。そのすべてが黒色の腰岳産のものである。これらの剥片には、重量15g前後の残核が３点、および、打面再生時に剥離したと思われる剥片が１点含まれている。

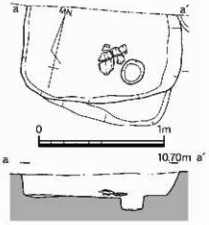


Fig.16　SK07平面図・断面図（S=1/30）

Ph.7　SK07 南から

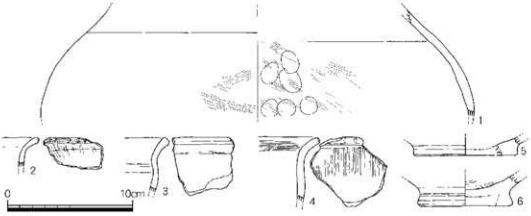


Fig.17　SK07出土遺物実測図（S=1/3）

Ph.8　SK98北壁　南から

SK98（Fig.18・Ph.8）

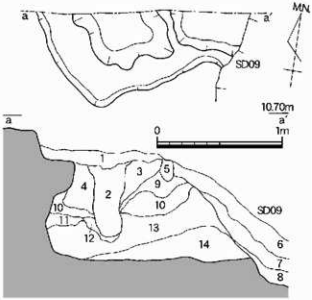
Ⅰ区中央部の調査区北壁際で検出した弥生時代前期の貯蔵穴である。SK07の東側に位置し、SD09などに上部をきられる。SD09完掘後に、平面プランを十分に検討しないまま掘削をすすめてしまったため、最終的に土層断面から貯蔵穴と確認することになった。北側が調査区外へとつづくため正確な平面形・規模は不明であるが、不整形のプランをなすと思われ、底面において東西に約1.5m、南北に0.7mの範囲を検出した。最下層に堆積した土器や炭化物を多く含む黒褐色粘質土（Fig.18－土層14）が三角形をなすことから、直径1.3m程度に復元できる可能性がある。深さは0.9m程度残存している。底面は多少でこぼこしており、壁面は底面から0.5m程度の高さまでほぼ垂直にたちあがり、そこからオーバーハングしてフラスコ形をなすと思われる。埋土は、ロームブロックを主体とする壁面崩落土と暗褐色粘質土が折り重なるように堆積する状況であった。

［SK98出土遺物（Fig.19）］

弥生土器および石器が出土した。弥生土器は細片が多く、図示できるものは少なかった。また、石器には旧石器時代のものが２点含まれており、うち１点は別途図示している（Fig.50－３）。

１・２は壷の底部である。３は甕の底部である。３点ともに摩滅が著しく、器面の調整などはよく分からない。

弥生時代前期の所産と考えられる石器としては黒曜石剥片が７点、計14.43g出土した。そのすべてが黒色の腰岳産のものである。これらの剥片には、使用痕ののこる剥片が２点含まれている。



1　暗褐色土＋暗黄褐色土（しまりなく空隙が多い）
2　暗黄褐色土＋黒褐色土
3　ローム崩落土
4　暗褐色粘質土（黒みが強くローム粒・炭化物を含む）
5　暗褐色土（ローム粒を多く含む）
6　暗褐色土（ローム微粒子を多く含む）　SD09
7　暗褐色土（しまりなく砂粒を多く含む）　SD09
8　暗褐色土（暗黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックを含む）　SD09
9　黒褐色土（ローム粒を含む）
10　ローム崩落土（粘性がありやわらかい）
11　暗褐色粘質土
12　暗黄褐色粘質土　SK98
13　ローム崩落土（しまりない）　SK98
14　黒褐色粘質土（土器片・炭化物を多く含む）　SK98

Fig.18　SK98平面図・断面図（S=1/30）

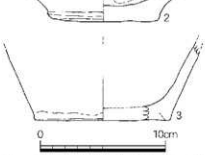


Fig.19　SK98出土遺物実測図（S=1/3）

② そのほかの遺構

SP88 (Fig.20)

Ⅰ区西半に位置する弥生時代前期の遺構である。SD05に上部をきられるため、SD05完掘後に検出した。同時期と考えられる柱穴はほかにも検出しているが、SP88はとくに掘削が深いレベルにまで及んでいることからここに報告しておく。

検出面の標高は10.6mである。南北方向に主軸をそろえる隅丸方形のプランをなし、長辺は0.75m、短辺は0.6mをはかる。検出面からの深さは1.0m～1.1mにおよぶ。柱痕跡は、平面的に検出を試みたが見つけることができなかった。埋土はローム粒を多く含む黒褐色土で、同時期と考えられるSK01・02・04などの埋土と類似する。土層の堆積状況から柱の抜き取りその他の痕跡は見いだせなかった。

周辺にSP88と同様の規模の遺構は見あたらないため、性格はよく分からないが、東側に展開するSK01・02・04等の貯蔵穴と同時期の遺構と考えられ、何らかの関連が想定される。

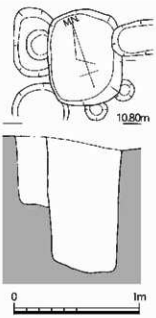


Fig.20　SP88平面図・断面図（S=1/30）

［SX88出土遺物（Fig.21）］

弥生土器および石器が出土している。

１・２ともに突帯文系の鉢および深鉢である。摩滅がすすんでいるため調整の痕跡は不明である。１は内外面ともに黒灰色を呈することから黒色化処理されていたと思われる。２は口縁端部に突帯を貼り付けた後上面をナデて、棒状工具による指突を加えている。

３は凝灰岩質砂岩石包丁である。刃部を欠損する。残存幅3.8cm、残存長2.8cm、厚さ0.75cmを測る。

このほかに黒曜石剥片が５点、合計5.65g出土した。そのすべてが黒色の腰岳産のものである。使用痕跡のあるものや調整を加えたものは含まれない。

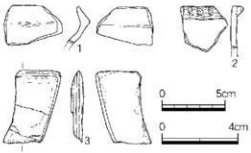


Fig.21　SP88出土遺物実測図（S=1/3）

SP96 (Fig.22)

Ⅰ区中央部において、貯蔵穴SK07・SK98の間に検出した弥生時代前期の柱穴である。

検出面の標高は10.6mをはかる。北側は調査区外へとつづくため正確な平面形・規模は不明であるが、掘形は、ほぼ南北方向に主軸をそろえる隅丸長方形のプランをなすと予想される。東西辺は0.85m、南北辺は0.65mを検出した。検出面からの深さは0.25m程度である。埋土はローム ブロックを含む暗褐色土をベースとする。

掘削中、柱痕跡を平面的に検出することはできなかったが、底面東側の北壁際に、直径0.25m、深さ

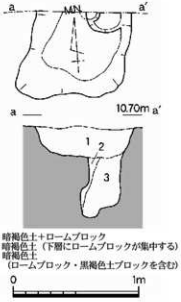


Fig.22　SP96平面図・断面図（S=1/30）

0.5mを測る柱痕とおもわれる小穴を確認した。この小穴は西側が小さくえぐれており、堆積する土層２は不自然に傾斜している。このことから、SP96の柱は抜き取られたと考えられる。また、本調査区内には、周囲にSP96と同じ規模をもつ遺構が見当たらないことから、SP88同様に、同時期の貯蔵穴SK07・SK98に関連する遺構である可能性も想定される。

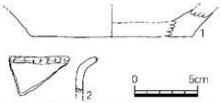


Fig.23　SP96出土遺物実測図（S=1/2・S=1/3）

［SK96出土遺物（Fig.23）］

弥生土器および安山岩製旧石器剥片が1点出土している。

１は壺の底部である。磨滅が著しく調整は不明である。２は甕である。口縁端部は丸くおさめ、全面にヘラ状工具による浅い刻目を施している。

SX63（Fig.24）

Ⅰ区東半に位置する、時期が特定できない遺構である。８世紀代に埋没した溝SD09にきられることから、それ以前の遺構と考えられるため、ここで報告しておく。

検出面の標高は10.6mをはかる。遺構の主体を占める北側は調査区外へとつづくため正確な平面形・規模は不明である。本調査地点では、南北方向に0.55m、東西方向に1.65mを検出した。検出面からの深さは0.9m～1.1mをはかる。底面は平坦でゆるやかに壁面へとつづき、壁面はほぼ垂直にたちあがる。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土をベースとする。

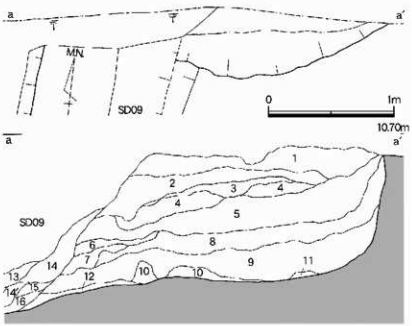
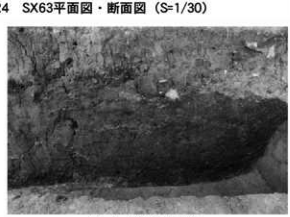


Fig.24　SX63平面図・断面図（S=1/30）

出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・輸入陶磁器・黒曜石石器などがある。層位的にとりあげることはしなかったため、量の少ない土師器・須恵器・輸入陶磁器は混入の可能性がある。いずれも細片であるため、図化し得ない。

先述したように、SD09との切り合い関係は平面的にも確認しており、古代以前の遺構と考えられるが、本調査区で検出したのは遺構全体の一部であり、時期の特定や遺構の性格などの詳細は不明である。


Ph. 9　SX63南から

b．古代の遺構と遺物

SD09（Fig.25・Ph.10・11）

Ⅰ区・Ⅱ区中央部を南北に縦断するように検出された。調査地点の南側に隣接する10次調査Ｂ区SD2005および北側に隣接する11次調査Ｆ区SD6701に連続し、その総延長は37mにおよぶ。主軸を真北にとることからも、奈良時代に大規模な規格で整備され、８世紀末までには埋没した、区画溝であると考えられる。便宜上、Ⅱ区で検出されたSD09についても、ここでまとめて報告する。

Ph.10　Ⅰ区SD09南から

Ph.11　Ⅱ区SD09北から

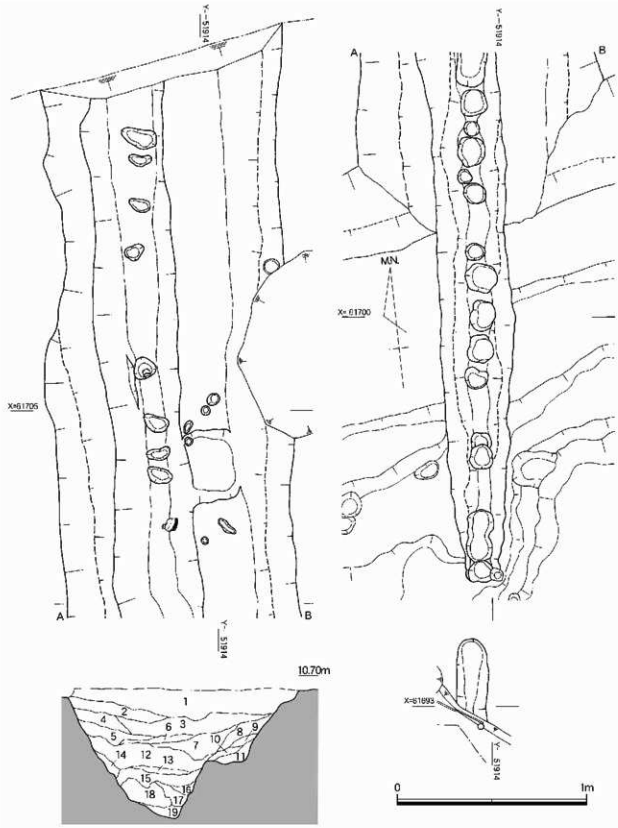
Ⅰ区では検出面から1.3m～1.4mの深さまで残存しているため、溝の構造をよく観察することができた（Ph.10）。しかし、Ⅱ区では、先述した切り通しおよびそのなかで営まれた水田やSX99によって破壊されているため、調査区南端とⅡ区北側（Ⅰ区との境界部分）において底面付近が部分的に検出されたにとどまった（Ph.11）。

Ⅰ区のSD09は、標高10.5m～10.6m付近で検出され、検出面における幅は2.3m～2.4m、底面までの深さは1.3m～1.4mを測る。底面の幅は0.25m～0.55mで、断面形はＶ字状に近い逆台形をなすが、標高9.8m付近において、東側に幅0.5m～0.65mの犬走り状のテラスを設けている。この東側のテラスから底面までの深さは約0.6mをはかる。

Ⅱ区のSD09は、東側のテラスまで上部がすべて削平されており、北側のⅠ区との境界部分では標高9.4m～9.7m付近で、調査区南端では標高9.4m付近で検出された。検出面から底面までの深さは、北側で0.15m～0.4m、調査区南端で0.1mを測る。

埋土はロームブロックあるいはローム粒を含む暗褐色土を主体とする。底面に近くなるほど粘性が増す。とくに、底面付近には水分を含んだ粘性の強い暗褐色土が体積しており（Fig.25－土層19）、滞水環境にあったものと推測される。また、土層堆積状況から、溝が一度埋没し（Fig.25－土層８～11）、その後再度掘り直しが行われたとみられる。土器は層位を問わず出土した。底面には掘削時の工具の痕跡とおもわれる三日月状あるいは隅丸三角形状のくぼみが残っていた。

なお、Ｂ区では、SD2005の下部からほぼ主軸を同じくする別の溝SD2007が検出されており、弥生時代前期の環溝の一部として報告されている。SD2007の埋土（黒褐色土）とSD09の犬走り状テラスより下部の部分の埋土（暗褐色土）は類似するため、注意して土層を検討したが、SD09の底面直上において須恵器甕胴部片が出土していることもあり、本調査区ではこのSD2007の延長は検出されないと結論した。



1　暗褐色土（しまり強い）
2　暗褐色土（しまりあり）
3　暗褐色土（上部にローム粒が集中ししまりあり）
4　暗褐色土
5　暗褐色土（ロームブロックを多く含む）
6　暗褐色土＋暗黄褐色土
7　暗褐色土（ローム粒を含みしまりあり）
8　暗褐色土（黒褐色土・ローム粒を含みしまり強い）
9　暗褐色土（ローム粒を多く含む）
10　暗黄褐色粘質土（しまりあり）
11　暗褐色土＋暗黄褐色粘質土（ローム粒を多く含む）
12　暗褐色土（ローム粒・炭化物・土器片を含む）
13　暗褐色土（粒子が細かく均質）
14　暗褐色土（ロームブロックを含みしまりない）
15　暗褐色土＋暗灰褐色粘質土
16　暗灰褐色粘質土（ローム粒を含む）
17　暗褐色土（ローム粒を含む）
18　暗灰褐色粘質土（ロームブロックを含む）
19　暗褐色粘質土
（ロームブロック・土器片を含む　しまりなく下層は粘性高い）

Fig.25　SD09平面図・断面図（S=1/40）

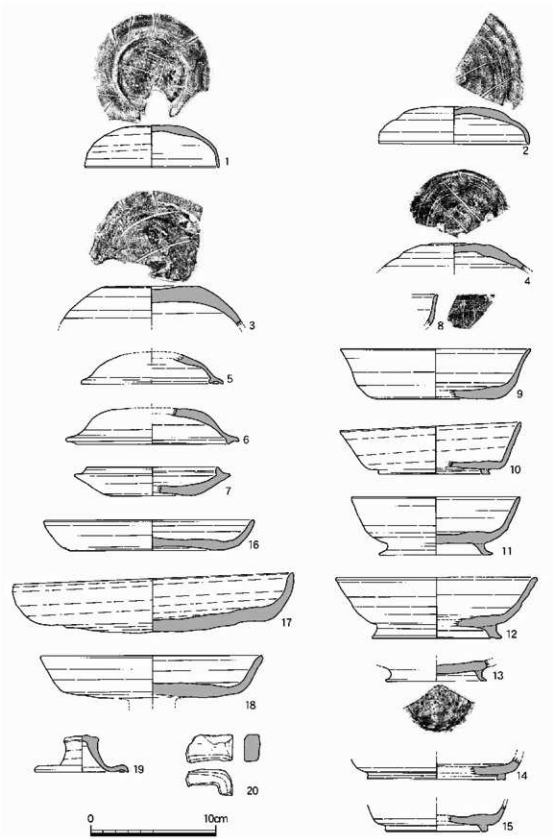


Fig.26　SD09出土遺物実測図①（S=1/3）

［ **SD09出土遺物** (Fig.26～Fig.29・Fig.50－3・Ph.12)］

弥生土器・土師器・須恵器・移動式竈・石器・鉄滓等が出土した。

1～20はすべて須恵器である。1～4は坏蓋である。すべて外面天井部に回転ヘラケズリをほどこし、ヘラ記号を残す。1は口径11.5cm、器高3.35cm、2は11.8cm、器高2.9cmをはかる。6世紀前半頃か。3・4は端部を欠損するため法量・形態は不明であるが、3は比較的器壁が厚く器高も高いと思われる。5・6は端部にかえりを有する坏蓋、7は受け部立ち上がりが小さい坏身である。口径10.5cm、器高2.3cmをはかる。5～7は焼成があまいため内外面ともに淡褐色を呈し、ローリングをうけて器表の剥落も著しい。7は坏蓋の可能性もある。8・9は須恵器坏である。8は外面にヘラ記号がほどこされる。9は口径15.1cm、器高4.0cmをはかり、外面底部は回転ヘラケズリで仕上げられる。ともに8世紀代に位置付けられる。10～13は7世紀後半頃のものとおもわれる碗である。10は底部からのたちあがりが稜をなし、底部外端からはなれたところに高台が貼り付けられる。11～13の高台は外へひらく形態をなす。これらのうち、11は焼成があまく内外面ともに淡褐色を呈する。また、13は高台内側にヘラ記号がほどこされる。14・15も碗であるが、高台の断面形は方形となり、底部からの器壁のたちあがりは稜をなさない。ともに8世紀代の所産である。16・17は皿である。16は口径16.7cm、器高2.4cmをはかり、外面底部は回転ヘラケズリで仕上げられる。17は口径22.2cm、器高4.45cmをはかる大型品である。18は高坏坏部で、脚部が剥離し、坏部外底面には直径3.8cmの同心円状刻目を施した接着面を観察できる。19は高坏脚部で、残存高は2.95cmである。20は平瓶の把手で、幅2.2cm、厚さ1.15cmをはかる。

21～32は土師器である。ほとんどが8世紀代に位置づけられる。摩滅がすすんでおり、調整を観察することは難しい。21～23は坏蓋である。21にはほぼ円盤状となったつまみがつく。22の外面天井部には回転を利用しないナデ調整の痕跡がうかがえる。23は口径20cm、残存高2.6cmをはかる。24～26は皿である。26は口径20.5cm、残存高1.85cmをはかる。27・28は底径13cmほどの高台付皿である。29～32は甑の把手で、内面に粗い縦方向のハケ調整が施される。33は移動式竈の脚端部である。端部は内外面・接地面を面取りし、板状工具による擦過によって仕上げている。

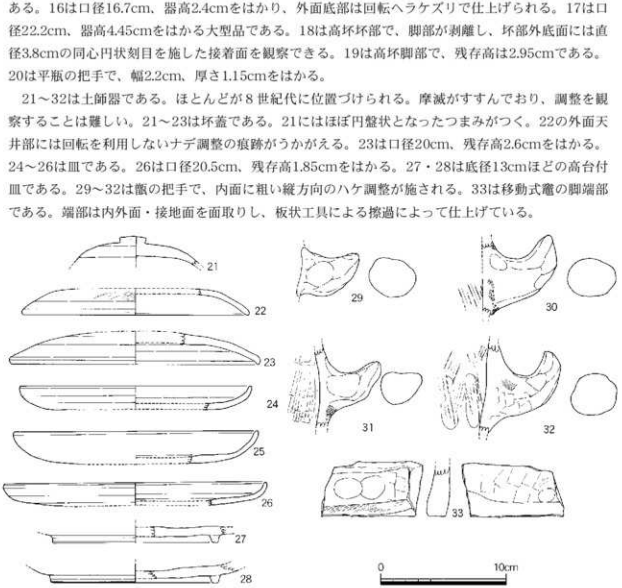


Fig.27　SD09出土遺物実測図②（S=1/3）

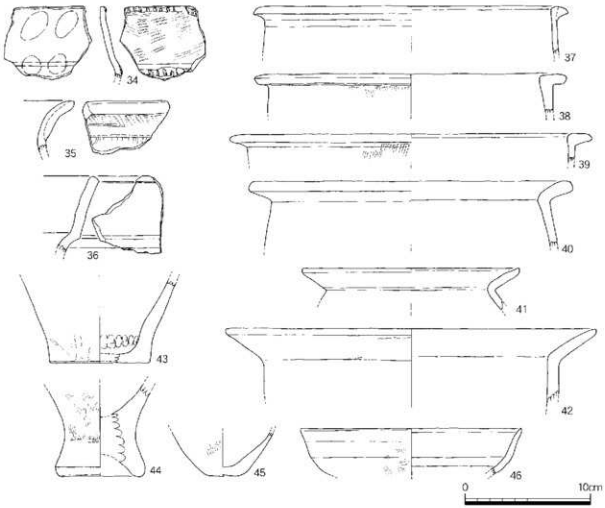


Fig.28　SD09出土遺物実測図③（S=1/3）

34・35・43は弥生時代前期の所産である。34は、口縁端部と屈曲部に二条の刻目突帯をめぐらす突帯文土器深鉢で、突帯はうすく刻目は棒状工具で浅く施される。外面は横方向の粗いハケ調整で仕上げられる。35は壺で、口縁部と頸部を画する段が縦方向のハケ調整によって強調されている。43は甕の底部である。36・41・45・46は古墳時代に位置づけられる土師器である。36は土師器二重口縁壺である。口縁部下端は稜をなさない。41は布留系甕、46は鉢、45は小型甕の底部か。37～39・44は弥生時代中期城ノ越式期の甕である。40・42は古代前半に用いられた土師器甕である。

47～54・Fig.50－3は黒曜石製の剥片石器で、すべて縄文時代晩期～弥生時代前期のものである。47・54は凹基式三角鏃、49～51は平基式三角鏃である。49は先端が0.27cmと厚いことから未製品の可能性もある。重量は0.65ｇである。50・51は先端を欠損する。52の三角鏃は、基部を左右対称としない。長さ1.95cm、幅1.3cm、厚さ0.42cm、重量0.88gをはかる。48・53は石鏃未製品である。48は制作時に破断したものと思われる。53は階段状剥離がある素材を使用してしまったために製作を放棄したのだろうか。長さ2.75cm、幅2.3cm、厚さ0.52cm、重量2.22gをはかる。Fig50－３は削器である。角礫を素材とした石核から剥出した自然面を表裏にもつ不定形剥片を素材とし、左側縁に両面から二次加工を加え鋭い刃をつくり出している。重量は3.61gである。

55・56は頁岩製磨製石剣である。55は左右対称を意識した石取りの優品であったとおもわれる

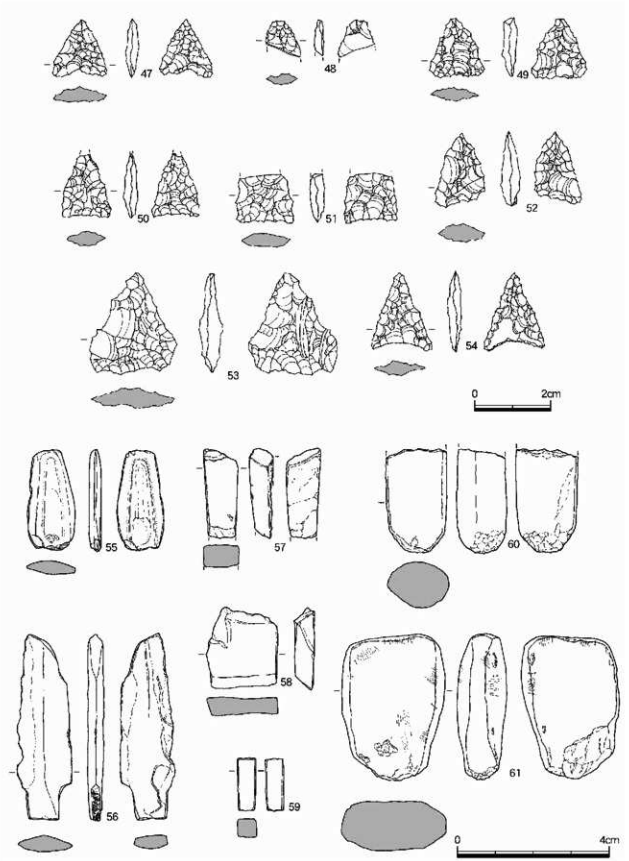
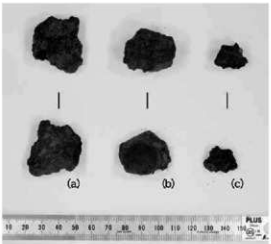


Fig.29　SD09出土遺物実測図④（S=1/1・1/2）

が、ローリングをうけて摩滅がすすんでいる。56は柄をつくりださない磨製尖頭器ともよばれるもので、先端は欠損している。55同様に全体にローリングをうけて器表はほとんど剥落しており、茎の側面のみ研磨の痕跡を観察することができる。残存長は9.8cmをはかる。57は砂岩製の扁平片刃石斧転用の砥石である。58は珪質頁岩製扁平片刃石斧である。左側縁は欠損している。59は砂岩製方柱状整形石斧である。残存長2.8cm、幅1.03cm、厚さ1cm、重量5.71gをはかる。60は砂岩製敲石、61は磨製石斧転用の蛇紋岩製敲石兼磨石である。それぞれ重量は70.3g、200.02gである。



Ph.12　SD09出土炉壁・鉄滓

このほかに、黒曜石剥片が547点、合計1301g出土した。このうち旧石器時代のものとおもわれるものは6点11.76gであり、１点は別途図示した（Fig.50－1）。旧石器剥片に淀姫産黒曜石が１点含まれる以外は、すべてが黒色の腰岳産のものである。旧石器をのぞいた剥片には、調整剥片が17点、使用痕のある剥片が20点、残核が42点、および、図化していない錐１点、錐未製品１点、石鏃未製品１点が含まれている。

Ph.12－（a）～（c）は製錬にともなう炉壁（a）（b）および鉄滓（c）である。上下などの方向は判断できない。共伴する土器の年代から８世紀以前の所産である。これらについては第４章で後述する。また、P.L.1－6は用途不明の青銅製品である。牛角形把手のような形態をなし、先端部と基部を欠損する。長さ1.35cm、厚さ0.25cm～0.75cmを**はかる。**

c．中世の遺構と遺物

①　土坑

SK11（Fig.30）

Ｉ区東半の調査区東壁際で検出した、13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる土坑である。北東隅は調査区外へとつづき、複数の柱穴にきられる。検出面の標高は10.6mで、ほぼ南北方向に長軸をそろえる隅丸長方形のプランをなす。長辺は2.35m、短辺は1.85mをはかり、検出面からは深0.15m程度残存している。底面はほぼ平坦で、ゆるやかに壁面へとつづく。埋土は砂礫と炭化物を含む黒褐色土をベースとする。

［**SK11出土遺物**（Fig.31）］

１は須恵質土器こね鉢である。口縁端部はまるみをもって肥厚する。２は土師器坏で、口径12.7cm、器高1.9cmをはかる。摩滅が著しく調整は観察でき

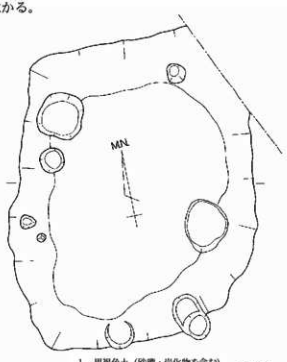


Fig.30　SK11平面図・断面図（S=1/30）

ない。3は、口径8cm、器高1cmの土師小皿である。底部は糸切り調整され、板目圧痕が残る。

図示した遺物のほかに、白磁口禿皿や弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・黒曜石剥片などが出土しているが細片のため図化し得ない。

Fig.31　SK11出土遺物実測図（S=1/3）

SK46（Fig.32）

Ⅰ区東半の南端で検出した、13世紀中頃～14世紀初頭に位置づけられる土坑である。遺構の南側半分は、Ⅰ区とⅡ区の境界となる切り通し遺構にきられて失われている。このため、正確な平面形・規模は不明であるが、南北方向に軸をそろえる隅丸方形をなすと思われる。検出面の標高は10.55mで、残存部分の規模は南北辺0.85m、東西辺1.7m、検出面からの深さは0.1mをはかる。底面はほぼ平坦で、ゆるやかに壁面へとつづく。埋土は灰褐色土をベースとする。

ほぼ同時期の遺構であるSK11とは、位置も近く、遺構の底面のレベルや主軸方向などが共通することから、同じ性格をもつ可能性が考えられる。

Fig.32　SK46平面図・断面図（S=1/30）

［SK46出土遺物（Fig.33）］

1は中国陶器の施釉無文盤で、口径は28.9cmに復元できる。内面および湾曲する口縁部上面に、茶味かかった乳白色の釉をほどこすが、口縁屈曲部の一部は釉を拭き取っている。体部外面は露胎である。2は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類である。釉は暗緑乳色を呈する。3はFig.32に出土状況を示した土師小皿である。口径11.3cm、器高1.7cmをはかる。摩滅がすすんでおり、調整は観察できない。

図示した遺物のほかに、弥生土器・土師器・黒曜石剥片などが出土しているが細片のため図化し得ない。

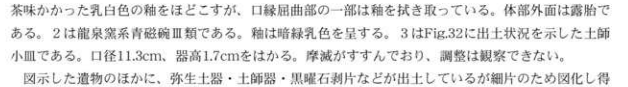


Fig.33　SK46出土遺物実測図（S=1/3）

② 木棺墓

SR56（Fig.34・Ph.13・14）

Ⅰ区中央部で検出した、12世紀末～13世紀前半に位置づけられる木棺墓である。SD09埋没後に西肩をきるようにして墓壙が掘削されている。SD09掘削中に検出したため、北東隅を確認することができなかった。本来の検出面の標高は10.6mである。

ほぼ南北方向に主軸をとるが、SD09主軸と比較すると若干西にふるようである。墓壙の平面形は長辺1.47m、短辺9.4mをはかる隅丸方形をなし、検出面から深さ約0.35m程度残存する。底面はほ

ぼ平坦で、垂直にたちあがる壁面へとゆるやかにつづく。埋土はロームブロックを含む暗褐色土をベースとするが、これは後の流入土で、墓壙底面にはローム由来の黄褐色整地土がみられる。木棺痕跡は見いだすことができなかった。

北西隅に龍泉窯系青磁碗２点、土師器坏３点が重なった状態で副葬されており、埋土下層では鉄釘も出土している。また、反対側の南東隅には墓壙底に据えられた石が検出された。遺物の出土状況から頭位は北であったと考えられる。

Ph.13　SR56南から

Ph.14　SR56遺物出土状況　北から

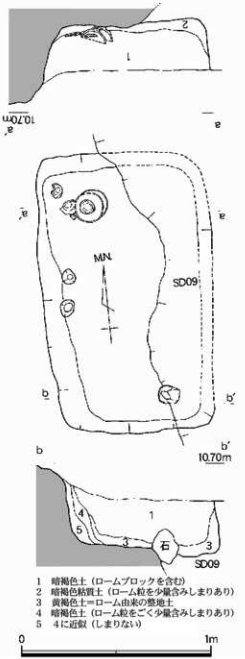


Fig.34　SR56平面図・断面図（S=1/20）

［SR56出土遺物（Fig.35）］

１は埋土中から出土した弥生時代前期のものとおもわれる突帯文土器である。口縁部よりやや下がったところに突帯を貼りつけ、ヘラ状工具で上下にきるようにして深い刻目をほどこす。２・３は副葬されていた土師小皿である。３は底部が糸切調整され、板目圧痕がのこるが、２は摩滅が著しく調整は観察できない。ともに淡橙色を呈する。

４・５は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。高台畳付および高台内には施釉されない。外面は鎬のない片彫連弁文がほどこされる。４の釉調はやや黄味がかる。５は内面見込みに文字を印刻し、暗緑色の釉をかける。６～８は埋土下層から出土した鉄釘で、断面は四角形をなし、2.4cm～3.2cm残存する。

このほかに土師小皿１個体、弥生土器・土師器が出土しているが、細片のため図化し得ない。

SR57（Fig.36・Ph.15・16）

SR56と同時期にいとなまれた木棺墓である。SR56の南側に連なるようにして主軸をそろえ、SD09の西肩をきって墓壙が掘削されている。標高10.6m前後で検出した。

墓壙の平面形は長辺1.44m、短辺9.1mをはかる隅丸方形をなし、検出面から深さ約0.4m程度残存する。底面はほぼ平坦で、垂直にたちあがる壁面へとゆるやかにつづく。埋土はロームブロックを含む暗褐色土をベースとする。木棺痕跡を検出することはできなかった。

北西隅に龍泉窯系青磁碗１点、龍泉窯系青磁小碗１点、土師器坏４点が重なった状態で副葬されていた。鉄釘は出土しなかったが、SR56との関係性から木棺墓と判断した。また、遺物の出土状況から頭位は北であったと考えられる。

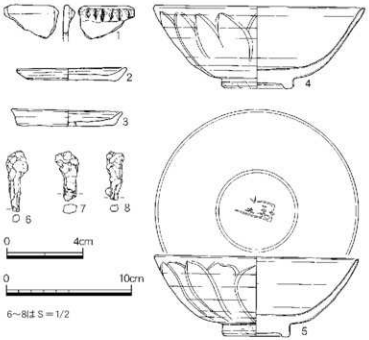


Fig.35　SR56出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

Ph.15　SR57南から

Ph.16　SR57遺物出土状況 東から

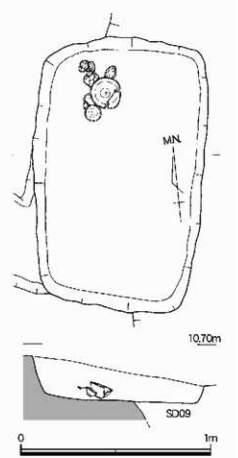


Fig.36　SR57平面図・断面図（S=1/20）

［SR57出土遺物（Fig.37）］

１は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。高台畳付および高台内には施釉されない。外面は鎬のない片彫連弁文がほどこされ、内面見込みには「王」の文字を印刻する。胎土は淡灰褐色、釉は暗緑色を呈する。２は龍泉窯系青磁小碗Ⅰ類である。体部下半よりヘラケズリがほどこされ、高台内はやや凸状に削られる。釉調は暗緑色を呈する。３～６は土師小皿である。口径は8.0cm～8.9cm、器高は１cm～1.1cmをはかる。３・４は摩滅がすすんでおり調整は観察できないが、５・６の底部は糸切調整され、板目圧痕がのこる。

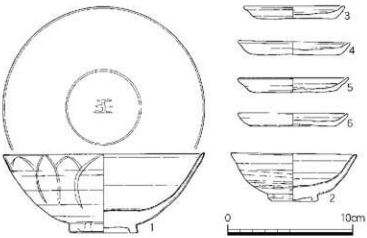


Fig.37　SR57出土遺物実測図（S=1/3）

SD05（Fig.38）

Ⅰ区西端に位置する中世の浅い溝状遺構である。弥生時代前期のSP88ほか周囲の遺構をきって掘削されており、南端と北端は調査区外へとつづいていく。

主軸は南北方向よりすこし東にふる。標高10.7m付近で検出し、幅0.6m～１m、検出長3.6mをはかる。検出面から深さ0.1m残存するのみである。断面形は浅いU字形をなす。

本調査区の北側に隣接する11次調査Ｆ区では、これに連続する溝が見あたらないが、SD6031は規模や主軸、断面形が共通しており、同じ時期・同じ性格のものである可能性がある。

出土遺物には弥生土器・土師器・輸入陶磁器などがあるが、いずれも細片のため図化し得ない。

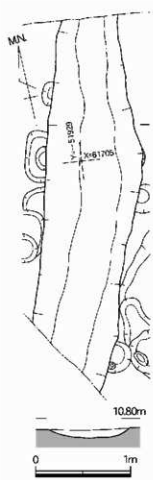


Fig.38 SD05
平面図・断面図（S=1/40）

③ 掘立柱建物・柵列

SB100（Fig.39）

Ⅰ区中央に位置する１間×１間の掘立柱建物である。出土遺物から12世紀中頃～13世紀代のものであると思われる。

標高10.65m～10.7mで検出した。主軸は磁北から14°西偏する。SP49以外の３つの柱穴で柱痕跡を確認し、柱間距離は1.95m～2.1mをはかる。柱穴堀形は直径0.45m～0.6mの不整円形プランをなし、検出面から深さ0.05m～0.25m程度残存する。柱痕の大きさは直径約0.2mで深さは検出面から0.2m～0.25mをはかる。柱穴の埋土はローム粒を含む黒褐色土である。

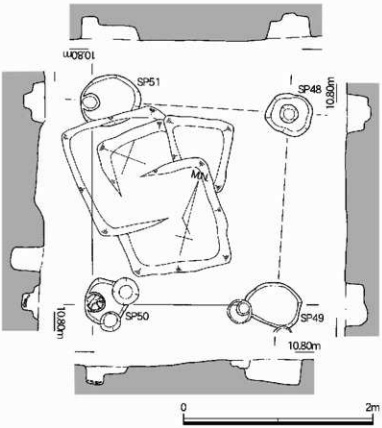


Fig.39　SB100平面図・断面図（S=1/40）

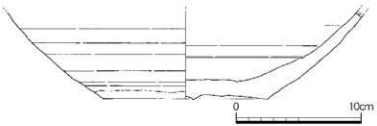


Fig.40　SB100出土遺物実測図（S=1/3）

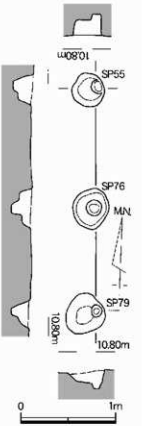


Fig.41　SA101
平面図・断面図（S=1/40）

［SB100出土遺物（Fig.40）］

Fig.40はSP50柱穴底から出土した無釉の輸入陶器鉢である。底径は13.1cmをはかり、体部は丸みをおびる。胎土には砂礫が多量に含まれ、器色は暗赤褐色を呈する。底部に板目圧痕がのこる。12世紀中頃～13世紀代のものである。

このほかにそれぞれの柱穴から弥生土器・土師器が出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。

SA101（Fig.41）

Ⅰ区中央のSB100の西側に位置し、３つの柱穴からなる柵列である。出土遺物から時期を特定できないが、主軸・柱穴の規模などの点でSB101と共通することから中世のものと判断した。

標高10.6m～10.65mで検出した。主軸は磁北から2°西偏する。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、柱間距離はSP55・SP76間で1.25m、SP76・SP79間で1.15mをはかる。柱穴堀形は直径0.35m～0.45mの不整円形プランをなし、検出面から深さ0.15m程度残存する。柱痕の大きさは直径約0.15mで深さは検出面から0.2mをはかる。柱穴の埋土は黒褐色土～暗褐色土である。

それぞれの柱穴から弥生土器・土師器などが出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。

（３）Ⅱ区の調査

本章（１）で述べたように、本調査地点ではⅠ区南端に東西方向にのびる南へのおちを検出した。このおちは、南側に隣接する10次調査Ｂ区において検出された東西方向にのびる北へおちとセットになって、切り通しを構成する。切り通しは、最小幅６ｍ、最大幅15mをはかり、西が最も標高が高く東へむかって傾斜しながら緩やかに開く形態をなす。本調査地点Ⅱ区は、その全体が、このような大規模な切り通しの中にある（Fig.42）。

この切り通しは、昭和初期に陸軍が作成した古地図に描かれており（Fig.52・53）、2009年には吉留秀敏氏が、８世紀後半につくられた東門ルートと西門ルートをつなぐ官道に関連する可能性を指摘していた。このため、道路遺構の有無をあきらかにすることがⅡ区の調査の大きな目的の１つとなった。

ところが、Ⅰ区の調査成果から、切り通しが13世紀中頃～14世紀初頭の遺構SK46をきっており、少なくとも中世後半以降に拡張が行われたか、あるいは中世後半以降の開削であることが、Ⅱ区の調査前に判明した。また、陸軍作成の古地図から、切り通し内が水田として利用されていたことが推測され、仮に８世紀後半につくられた道路遺構が存在していたとしても、水田遺構によって削平されている可能性も想定された。このため、道路遺構を土層断面から確認するため、面的調査に先行してトレンチ調査を実施することとした（Fig.42－トレンチ１～トレンチ４）。

しかし、トレンチ調査の結果、道路関連遺構やその他の遺構を確認することはできなかった。古地図に描かれた水田は中世後半までさかのぼり、その開墾が鳥栖ローム層上面にまで及んでいたためである。最終的に、Ⅱ区の調査では、近世とおもわれる水田耕作の痕跡と、中世後半に位置付けられる溝状遺構SX99を検出したにとどまった。以下にトレンチ調査の成果とSX99について報告する。

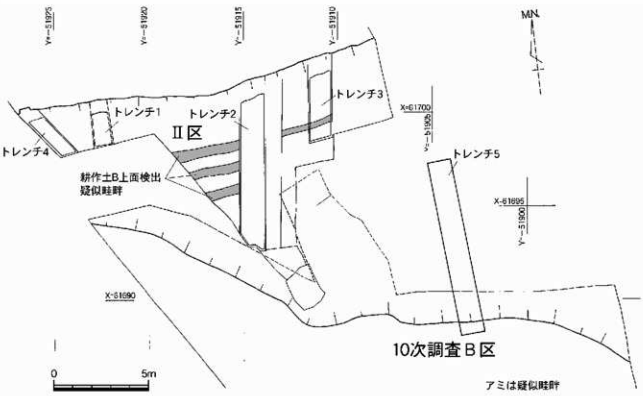
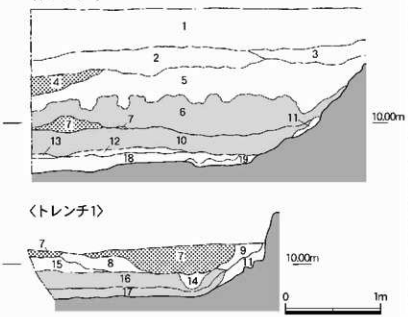


Fig.42　Ⅱ区トレンチ配置および耕作土Ｂ上面遺構配置図（S=1/200）

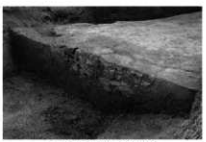
トレンチ１・４ (Fig.43)

トレンチ１・４は、Ⅱ区西半に設定した。層序はFig.43に図示したとおりで、標高10.00m付近まで近現代の攪乱がはいる（土層４・７）。近隣住民によると、戦時中は、水田を埋め立てて軍需工場とし、戦後は製材工場が営まれていたということであり、攪乱土層４・７はこれらに由来するものと思われる。この下に、近代の鉄釘などが出土する戦前の耕作土Ａが堆積する（トレンチ４では土層10、トレンチ１土層16・17に相当）。トレンチ１では耕作土Ａの直下、標高9.65m前後で鳥栖ローム層上面にいたる。一方、トレンチ４ではさらに耕作土Ｂ（土層18）を挟んで、標高9.5m付近で鳥栖ローム層上面にいたる。

トレンチ１・４ともに道路遺構と考えられる硬化面や波板状圧痕は土層断面で確認することはできなかった。また、鳥栖ローム上面に貯蔵穴などの遺構は残存しない。



トレンチ４西壁　北東から

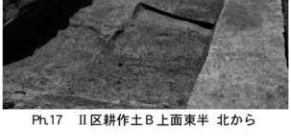

トレンチ１西壁　北東から

1　砕石
2　茶褐色
3　攪乱（木質を多く含む）
4　攪乱（ロームブロック・石炭ガラなどを多く含む）
5　暗褐色土
6　灰色土（砂礫を含む）
7　攪乱（ロームブロック＋灰色粘土ブロック）
8　褐色粘質土
9　暗褐色土（ローム粒が偏在ししまり強い）
10　青灰色土（砂礫を均質に含み粒子細かい）＝［耕作土Ａ（近代）］
11　暗褐色土（ローム粒を含む）
12　10に近似（砂礫を含まない）
13　灰褐色粘質土（マンガンが沈着）
14　灰褐色土
15　灰褐色土（砂礫を含みマンガンが沈着）
16　灰褐色粘質土（砂礫を含みマンガンが沈着）
17　灰褐色土（砂礫を多量に含みマンガンが沈着）
＝［耕作土Ａ（近代）］
18　灰褐色土（砂礫を多く含みマンガンが沈着）＝［耕作土Ｂ］
19　暗黄褐色粘質土
土層番号はFig.43・44共通

Fig.43　トレンチ１・トレンチ４西壁土層図（S=1/40）

トレンチ２・３ (Fig.42・44・Ph.17・18)

トレンチ２・３は、Ⅱ区中央部に設定した。層序はFig.44に図示したとおりで、トレンチ１・４と同様に、標高10.00m付近まで近現代の攪乱がはいる（土層４・７）。トレンチ１・４で観察できた戦前の耕作土Ａは、トレンチ２・３では土層26に相当し、同様に近代の鉄釘や陶磁器等が出土した。トレンチ２・３では、この耕作土Ａに、床土と考えられるシルト質の土層27～28がともなう。


Ph.17　Ⅱ区耕作土Ｂ上面東半　北から

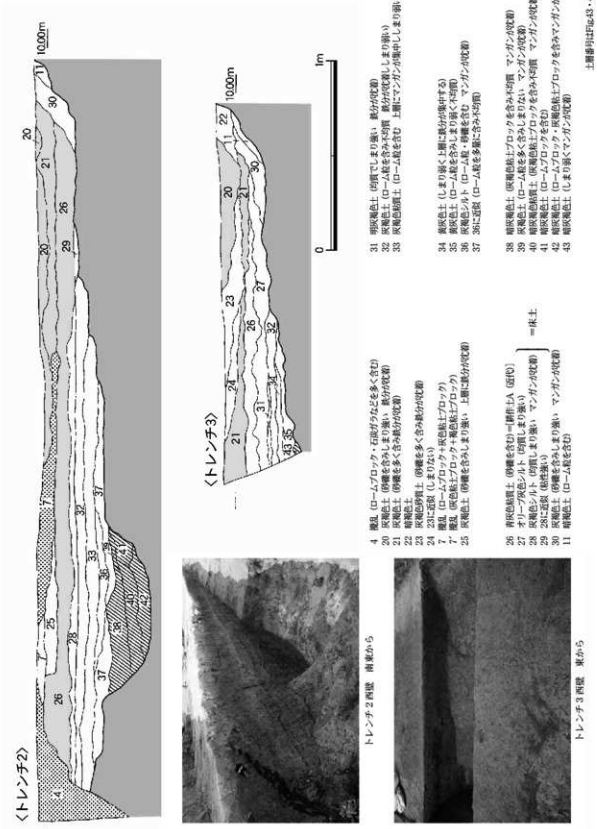


Fig.44　トレンチ２・トレンチ３西壁土層図（S=1/40）

Ph.18　Ⅱ区耕作土Ｂ上面　西から

Ph.19　トレンチ５北から

さらに耕作土Ａの下にはマンガン・鉄分の沈着が著しい新たな耕作土Ｂ（土層31～32）が堆積する。調査当時は、耕作土Ｂが道路硬化面である可能性を想定し、この面で遺構検出を試みた。しかし、疑似畦畔が検出されるにとどまり（Fig.42・Ph.17・18）、道路関連遺構その他の遺構を検出することはできなかった。

トレンチ５（Fig.42・Ph.19）

トレンチ５は、Ｂ区で検出された北へのおちの形状や規模を再度確認することを目的として、本調査区の東側とＢ区の南東側を連結するように設定し、埋め戻し終了後に重機によって掘削した（Fig.42）。

本調査地点で検出した南へのおちは、上場から下場までの距離が0.7m～１mで比高差0.8m～0.9mをはかり、45°の角度をもって開削されているのに対し、Ｂ区で検出された北へのおちは、Ph.19に示したように、約７mで比高差0.7mほどしかなく、非常にゆるやかな傾斜であることが判明した。トレンチ５南部の鳥栖ローム層上面には、本調査Ⅱ区で検出した水田耕作土が堆積することから、Ｂ区で検出した切り通しの南肩では、中世後半以降に行われた水路SX99開削や開墾などにともなって、本調査地点で検出した北肩よりも大規模な造成が及んだ可能性が考えられる。

［Ⅱ区耕作土・トレンチ出土遺物］

Ⅰ区で検出された遺構に矛盾しない時期幅の遺物が出土した。近代の遺物をのぞけば中世後半期の遺物が中心である。

１は須恵器甕である。口縁端部下に工具痕がのこる。２は両端を欠損する不明土製品で、断面は不整五角形を呈する。胎土は精良で淡橙色を呈し、器表に指オサエとハケ調整が観察できる。３は粉青沙器印花文碗あるいは皿。４は龍泉窯系青磁碗。胎土は淡橙色で釉はうすく淡暗緑色を呈する。３・４ともに15世紀代に位置づけられる。５は主要剥離面がのこる黒曜石製錐で、重量は1.3gである。６は砂岩製太型蛤刃石斧で、基部・刃部を欠損する。200.02gをはかる。

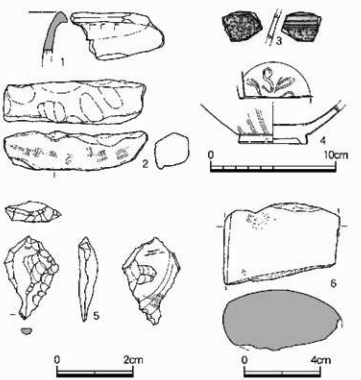


Fig.45　Ⅱ区耕作土・トレンチ出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/3）

SX99（Fig.47・Ph.20）

近世の疑似畦畔などを検出した耕作土Ｂを除去した後、鳥栖ローム層上面において検出された。Ⅱ区中央部から南部を東西に縦断するように展開する溝状遺構である。出土遺物その他から、中世後半に掘削されたと考えられる。

Ph.20　SX99西から

調査区北東隅からつづく溝と調査区南東隅からつづく溝が、調査区内で合流し、Ｙ字形をなす。合流した溝は調査区西端におよび、調査区外へ続いていく。なお、南東隅から合流する溝は、調査地点の南側に隣接する10次調査Ｂ区SD2001から連続するものである。

検出面である鳥栖ローム層上面の標高は、北東溝で約9.5m、南東溝・合流部・西溝で約9.25m～約9.3mをはかり、東から西へゆるく傾斜する。各溝の幅は0.55m～0.7m程度であるが、合流部に近づくにしたがって広くなる。北東溝が最も深く検出面から0.3m残存しており、南東溝・西溝は合流部から遠ざかるほど浅くなり、深さは検出面から約0.2m程度である。各溝の断面形はU字形をなし、でこぼこのある底面から壁面がゆるやかにたちあがる。合流部の規模は、南北約1.2m、東西約２mをはかる。検出面からの深さは0.4mで、合流部が最も深くなる合流部から各溝の連結部には掘削時の工具の痕跡とおもわれる三日月状あるいは隅丸三角形状のくぼみが残っており、一部では足跡も検出された。

埋土はロームブロックを含む灰褐色粘質土～暗灰褐色粘質土をベースとする。灰色粘土ブロックを含む場合もあり、全体的に水分が多くマンガンの沈着が著しい。合流部では遺構掘削時に湧水した。このことからSX99は滞水環境にあったと考えられる。

［**SX99出土遺物**（Fig.46）］

１は弥生土器甕である。器壁の剥落がすすんでいるので、調整を観察することはできない。前期のものか。２は須恵質土器のこね鉢である。口縁端部は丸みを帯びてわずかに肥厚する。３は龍泉窯系青磁碗の底部である。明るい緑乳色の釉を全面に施釉し、底部内面の釉を輪剥ぎする。内面見込みには文様を印刻する。15世紀代のものか。４は器表が褐色を呈する土師質の火鉢である。口縁部は内側に屈曲し、屈曲部以下に巴文をスタンプする。

このほかに、弥生土器・土師器・須恵器・輸入陶器・瓦などが出土しているが、細片のため図化し得ない。

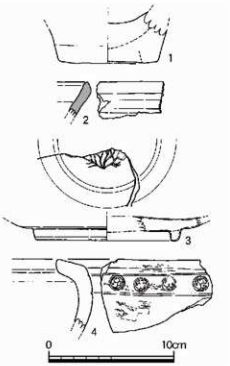


Fig.46　SX99出土遺物実測図（S=1/3）

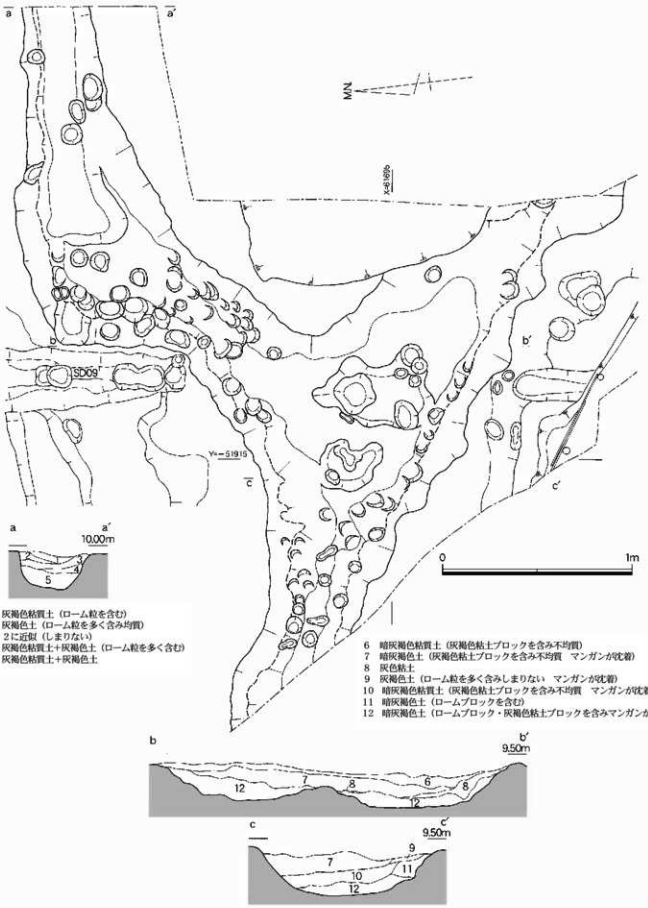


Fig.47　SX99平面図・断面図（S=1/40）

（４）その他の出土遺物

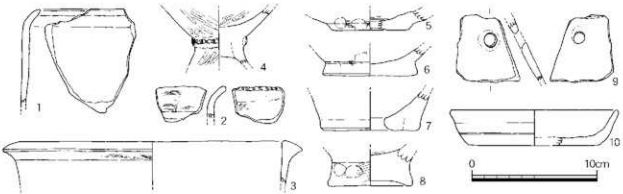


Fig.48　そのほかの出土遺物実測図①（S=1/3）

１はSK13・SK15検出時に出土した、弥生土器甕である。口縁部は短く外反し、刻目をもたない。外面は縦方向のナデ調整で仕上げられる。２も弥生土器甕である。外反する口縁端部全面にヘラ状工具により浅い刻目を密にほどこす。口縁部内面には横方向のハケ調整がみられる。SP81から出土した。３は口縁部上面が平坦となる弥生土器甕で、SK01～SK04検出時に出土した。４はSP83から出土した、黒色磨研の高杯である。坏部と脚部の境界に刻目突帯文がめぐる。内外面ともに縦方向・斜め方向のヘラミガキで丁寧に仕上げられている。器表は黒灰色～黒褐色を呈する。５は弥生土器壺の底部である。SK01～SK04検出時に出土した。６～８は弥生土器甕の底部である。６は外端部が張り出すタイプで、Ⅰ区遺構検出土器に出土したものである。７はSK13・SK15検出時に出土した。底部に穿孔を有する。８はわずかに上げ底となるもので、外面に指オサエ、内面に不定方向のハケ調整がのこる。SP68から出土した。以上の１～８はすべて弥生時代前期の所産である。９は古墳時代前期のものとおもわれる土師器で、鉢または高杯の脚部である。磨滅がすすんでおり、調整等は観察できない。器表は淡褐色～淡赤褐色を呈する。SK10から出土した。10はSP34から出土した土師器坏である。口径13.5cm、器高2.8cmをはかり、底部は糸切り調整される。13世紀代のものか。

Fig.49には石器・石製品・土製品を図示した。13・15・16・21はSK01・SK02検出時に、18・20はSK01～SK04検出時に出土したものである。

11～16は黒曜石製の鏃である。11は攪乱から出土した凹基式三角形鏃の未製品である。左脚端部を欠損し、裏面には階段状剥離がのこる。長さ２cm、幅1.65cm、厚さ0.415cm、重量1.08gをはかる。12は平基式三角形鏃で、左脚端部を欠損する。先端の一部に二次加工を加えていないことから未製品の可能性がある。土師器片が出土するSP75から出土した。13は凹基式三角形鏃である。右脚端部および先端を欠損する。残存長2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.45cm、重量1.17gをはかり、比較的大型のものである。14は鏃身の上半を欠損する平基式の鏃である。幅1.6cm、厚さは0.25cm。SR56から出土した。15は平基式三角形鏃で、両側縁が湾曲するタイプのものである。長さ1.85cm、幅1.25cm、厚さ0.41cm、重量0.75gをはかる。16は先端部を欠損する平基式三角鏃で、脚部が非対称である。二次調整がおよばなかった主要剥離面から、打点を上にして剥片剥離の方向を石鏃の主軸として利用していることがわかる。また、表面には表皮が残されている。残存長1.75cm、幅1.75cm、厚さ0.55cm、重量1.57gをはかる。17は黒曜石製の錐である。長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.56cm、重量1.52g。中世の遺構SK13・SK15検出時に出土した。18は玄武岩製磨製石斧である。基部を欠損する未製品か。ローリングをうけており磨滅がすすんでいる。19はSP33から出土した砂岩製砥石である。重量124.01gをはかる。表面には縦方向あ

るいは斜め方向の使用痕跡が観察できる。ともなう出土遺物はない。20は長さ4.5cm、幅2.25cmをはかる土製投弾である。21は古墳時代のものとおもわれる滑石製紡錘車である。半分が失われている。片面から穿孔され、穿孔径は0.5cmをはかる。側縁には水平方向に研磨痕がのこる。直径4.6cm、厚さ0.45cmをはかる。

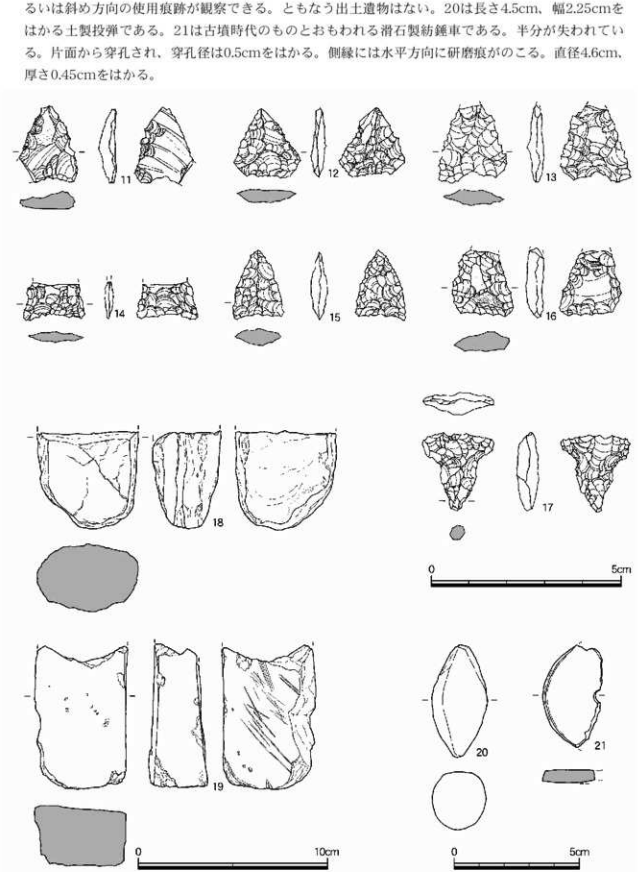


Fig.49　そのほかの出土遺物実測図②（S=1/1・1/2・2/3）

Fig.50－１・２・４・５は各遺構から出土した旧石器である。Fig.50－３はp.27で既述した。１はSD09から出土した腰岳産黒曜石製の原の辻型台形様石器である。すぢまりの不定形剥片を素材とし、左側縁を素材のまま残して刃部としている。素材先端から右側縁にかけて主要剥離面から刃潰し加工をほどこし、素材基部打面にも軽い二次加工を加えることによって、台形に仕上げる。刃部の一部は破損している。後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の所産である。２はⅡ区耕作土Ｂから出土した剥片石器である。腰岳産黒曜石の角礫を素材とした石核から剥出された、先端に自然面がのこる縦長剥片で、左側縁に使用によるとおもわれる刃こぼれがみられる。刃こぼれのパティナには風化が異なるものがあるため、元来旧石器時代に使用された剥片を弥生時代前期にも使用したと考えられる。４はSK98下層から出土した椎葉川系黒曜石製の抉入削器である。不定形剥片の右側縁に主要剥離面からの二次加工を加え、抉入部をつくりだしている。５はSK07から出土した松浦牟田産黒曜石の石核である。円礫を素材として半割し、まず半割面を打面として表皮を剥出するかたちでＤ・Ｆ面を割り、次にＤ面と同じ打面を90°左にずらし２cm前後の不定形剥片を剥出し（Ａ面）、Ａ面を打面として素材半割面（Ｅ面）で剥片剥出を行っている。Ａ面にはＥ面を剥出するためのパンチ痕がみられる。その後Ｅ面を打面としてＣ面で２～３cm前後の剥片を剥出し、さらに90°右にずらし、Ｂ面で剥片剥出を行い、Ｅ面の打面調整を行った段階で放棄している。後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の所産である。

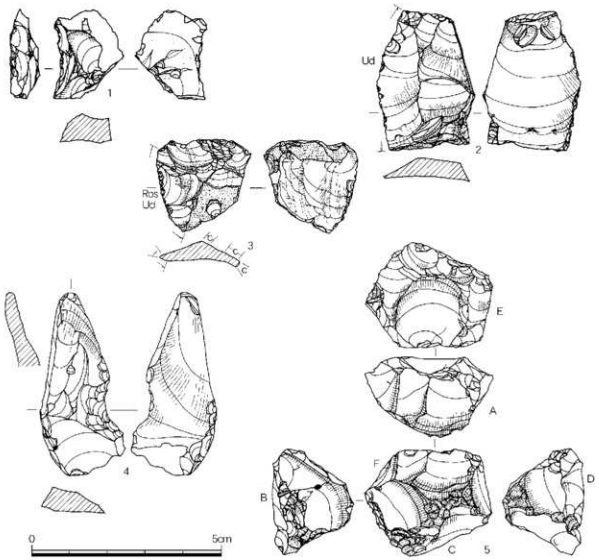


Fig.50　そのほかの出土遺物実測図③（S=1/1）

第４章　まとめ

五十川遺跡では、いままでの調査成果から、弥生時代前期後半～中期初頭および古墳時代前期、中世後半の３つの時期にとくに遺構が集中して検出されている。本調査地点でも、これに沿う調査成果を得ることができた。Fig.52は、本調査区において検出された主要遺構の時期ごとに、周辺調査区を含めた遺構の変遷をまとめたものである。

① 弥生時代前期（Fig.52－①）

本調査区では、板付Ⅱａ式期に営まれた長方形～方形プランをなし壁面が直立する貯蔵穴SK01・02・04および、底面円形で壁面が内傾する袋状貯蔵穴SK98を検出した。周辺調査区では、板付Ⅱａ式期に、Ｂ区以北に貯蔵穴・土坑が出現し、とくにＦ区南半では環状に配置される状況が確認されている。本調査区の貯蔵穴はこれにつづくものと考えられる。Ｂ区・Ｆ区と同様に、これらの貯蔵穴からは多量の黒曜石剥片が出土しており、ほかの遺構から出土したものも合計すると、その量は合計1222点2292.89gを数えるほどである。

板付Ⅱｂ式期になるとＦ区では、貯蔵穴群の東側に竪穴住居が出現して集落域が成立し、北側には木棺墓・土壙墓からなる墓域がともなうことがわかっている。しかし、本調査区の貯蔵穴群の東側には住居を確認することはできなかった。ただし、SK02東側に円形プランをなす時期不明の焼土を検出しており（Fig.５）、当該期の住居が存在した可能性も考えられる。一方、SK02とSK98の西側には、規模もやや大きく掘削も深くまでおよぶSP88・SP96が検出されている。ほかの柱穴とセットにならず単独で存在することから、SK02・SK98との何らかの関連があるかもしれない。

なお、集落のはずれにあたるＢ区・Ｄ区では溝が検出され、これらを環溝とする指摘がなされているが、Ｂ区SD2007の延長部分は本調査区で確認することができなかった。溝が円形をなす可能性は低いとおもわれる。

② 古代（Fig.52－②）

10次調査Ｂ区SD2005・11次調査Ｆ区SD6701に連続する区画溝SD09からは、製錬にともなう炉壁２点と鉄滓１点が出土した（p.29－Ph.12）。SD09からは、弥生時代前期・古墳時代前期・７世紀～８世紀代の遺物を中心に出土しており、また、北部九州地域において箱形製錬炉による本格的な製鉄がはじまるのは８世紀代以降と考えられている。これらのことから、SD09から出土した製錬炉壁・製錬滓も８世紀代のものと考えるのが妥当であろう。

８世紀代の製鉄遺跡は、砂鉄産地の糸島半島を中心に早良・大宰府などに集中する傾向にあり、五十川遺跡周辺の福岡平野中部・北部において、当該期の製鉄遺構は検出されておらず、製鉄関連遺物の出土もほとんどない。このため、五十川遺跡周辺に製鉄遺構の存在を示唆するこれらの遺物の重要性は高いとおもわれる。また、SD09は台地中央部にむかって延伸することから、五十川遺跡が立地する台地中央部には古代の製鉄関連遺構が存在した可能性も考えられる。今後の調査に期待したい。

③ 中世前半（Fig.52－③）

本調査区では周辺調査区にくらべて比較的多くの遺構が検出され、中世前半期では、Ｆ区南部から本調査区、およびＡ・Ｉ区に、11世紀後半～14世紀前半のものとおもわれる井戸・掘立柱建物・溝・土坑などが集中する状況がわかってきた。本調査区では、SR56・57（12世紀末～13世紀前半）→SK11・SK46（13世紀中頃～14世紀前半頃）という変遷をたどることができる。SB01・SA01は出土遺物から12世紀中頃～13世紀代のものとみられるが、木棺墓との先後関係はよくわからない。

本調査区で検出された２基の木棺墓には、それぞれ、龍泉窯系青磁碗２点、龍泉窯系青磁碗・小碗

Fig.51　御供所井尻線整備予定地内の遺構配置図（S=1/500）

座標系は昭和43年に建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系

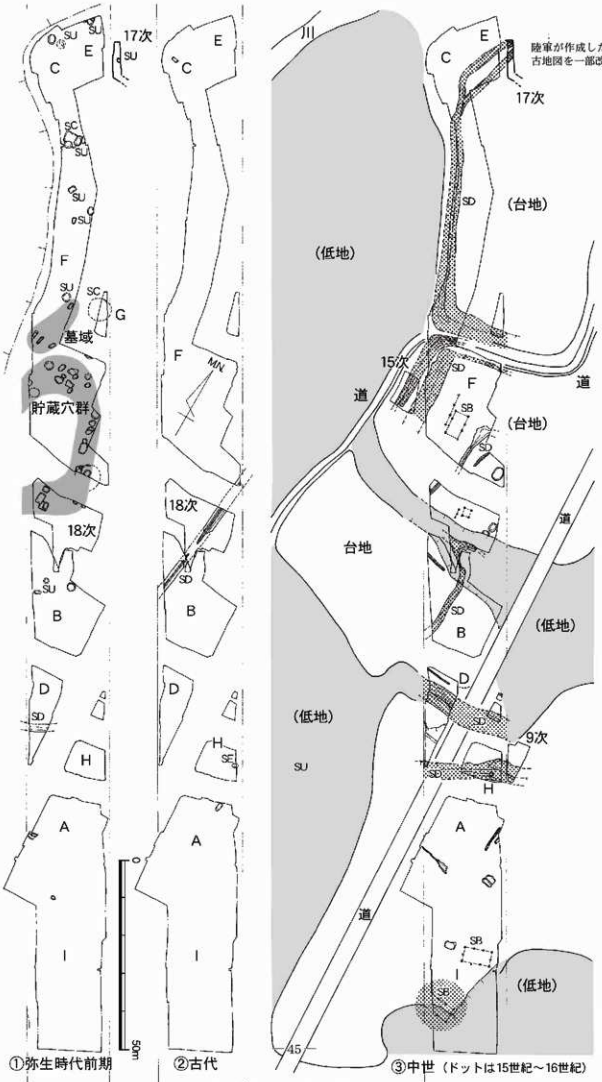


Fig.52　調査区周辺の遺構変遷図（S=1/1000）

２点が副葬され、注目される。五十川遺跡では、このほかに、３次調査において、11世紀前半に越州窯系青磁碗を副葬する木棺墓が検出されている。文献には、鎌倉時代初期には「那珂西郷」が箱崎宮所領であったという記述もあり、これらの資料は五十川の有力者の性格を考えるうえで重要である。

④ 中世後期（Fig.52－③・Fig.53）

本調査区Ⅱ区は、昭和初期に陸軍が作成した古地図に描かれた切り通しに該当し、吉留秀敏氏は古代官道水城西門ルートの一部廃絶にともなって８世紀後半代に成立した、西門ルートと東門ルートを結ぶ新しい官道にともなう遺構である可能性を想定していた（吉留2009）。しかし、調査の結果、この切り通しの内部において、中世後半に掘削され埋没したと思われる溝状遺構が検出され、それ以降谷水田として使用されてきた状況が明らかになり、道路遺構を発見することはできなかった。また、切り通しは13世紀中頃～14世紀前半の遺構SK46を破壊しているため、仮に道路建設のために古代に切り通しが設けられていたとしても、水田開発により中世後期以降に拡張・削平されており、やはり古代の切り通し遺構であることは証明できない。

しかし、本調査地点から東へ140mの地点において行われた試掘調査では、地表下2.2mの鳥栖ローム層上面において凹凸が検出されている（Fig.53）。この地点は、古地図によれば、本調査地点と同様に水田とそれをつくる崖面から構成されており、この試掘調査の成果から、鳥栖ローム層上面に水田による削平がおよばず道路遺構が残存する可能性が残されていることがうかがえる。今後の調査において留意すべきであろう。

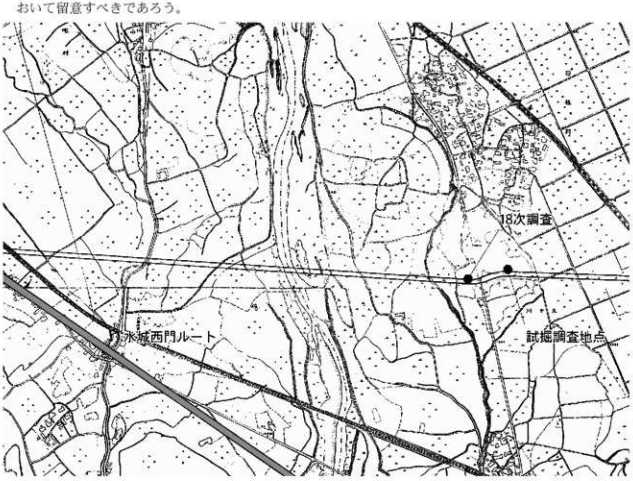


Fig.53　古代官道関係地図（S=1/10000）

［ 参考文献 ］
岡寺　良2002「製鉄関連工房の様相と歴史的位置づけ」『宝満山遺跡群　浦ノ田遺跡Ⅲ－県道九州国立博物館線関係埋蔵文化財調査報告－』福岡県文化財調査報告書第169集　福岡県教育委員会
角川日本地名大辞典編纂委員会1988『角川日本地名大辞典』40福岡県　角川書店
吉武　学編2009『五十川遺跡６』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1029集　福岡市教育委員会
吉留秀敏2009「鴻臚館から大宰府への道－水城西門ルート福岡市内探索の中間報告－」『市史研究ふくおか』第４号

1　SK02出土弥生土器壺（Fig.10－4）

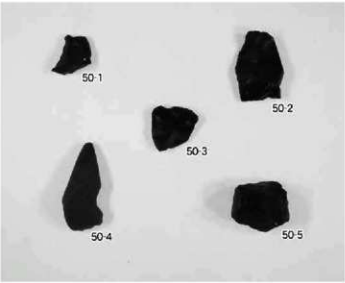
2　SK02出土弥生土器甕（Fig.13－18）

3　SR56出土龍泉窯系青磁碗（Fig.35－４）

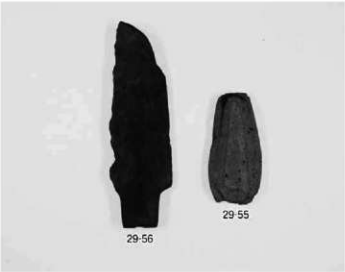
4　SR56出土龍泉窯系青磁碗（Fig.35－５）

5　SR57出土龍泉窯系青磁小碗（Fig.37－２）

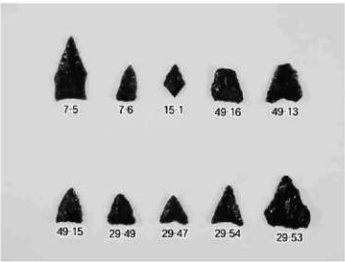
6　SD09出土不明青銅製品



1　出土旧石器およびSD09出土削器
(Fig.50)



2　SD09出土磨製石剣（Fig.29）



3　SK01・04・SD09出土石鏃

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しどうごくしょいじりせんけんせつにともなうはっくつちょうさほうこくしょしょな　ごじゅっかわいせきなな
書　　名	市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書　Ⅶ　五十川遺跡７
副 書 名	－ 五十川遺跡第18次調査の報告 －
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第1113集
編 著 者 名	松尾奈緒子
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621福岡市中央区天神１丁目８番地１号　TEL092-711-4667
発 行 年 月 日	2011年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ごじゅっかわいせき	ふくおかしみなみく	40132	0915	33°33′30″	130°26′18″	20090701	239	記録保存調査
だいじゅうはちじちょうさ	ごじゅっかわにちょうめ					～		
	さんじゅうさんばんち					20090930		
五十川遺跡	福岡市南区五十川							
第18次調査	2丁目33番地							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五十川遺跡 第18次調査	集落	弥生時代 奈良時代 中世 近世	弥生時代－貯蔵穴 古代－溝 中世－溝・土坑 近世－水田	弥生土器・土師器 須恵器・瓦器 輸入陶磁器・瓦 黒曜石剥片石器 磨製石器　など	

要　　約	五十川遺跡は那珂川右岸に形成された南北につらなる中位段丘面の上に立地しており、本調査地点はその南西端の西側斜面にある。調査区北半では、鳥栖ローム層上面に遺構が良好に遺存していたが、調査区南半は、東西方向に主軸をもつ最大幅15mをはかる切り通しのなかにあり、中世後半以降現代まで継続的に行われた水田開発によってほとんどの遺構が失われていた。 本調査地区北半では、弥生時代前期後半に比定される方形および袋状の貯蔵穴を５基、隣接する調査区でも確認されている磁北を主軸とする８世紀代の区画溝、同様に磁北を主軸とする12世紀末～13世紀前半代の木棺墓を２基などを検出した。一方、調査区南半では、中世後半期の水路状遺構、および近代まで継続する水田を検出した。 貯蔵穴からは弥生時代前期後半の甕・壺・鉢・黒曜石剥片等が、区画溝からは７世紀後半～８世紀を中心とする須恵器・土師器等が、木棺墓からは龍泉窯系青磁碗および土師小皿などが、コンテナケース17箱分出土している。

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書　Ⅶ

五十川遺跡　７

－五十川遺跡第18次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1113集

2011年（平成23年）3月18日

発　行　福岡市教育員会
　　福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　陽文社印刷株式会社
　　福岡市南区大楠２丁目４－10